

酒呑みで何が悪い!? ?

サンダル履いたアロハの猫

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

死んで  
生まれ変わつて  
ダンジョンに潜り  
酒を飲んで  
喧嘩をする  
そんなよくある話

目

次

酒を呑む前

プロローグ

始まりの一杯

01 ファミリア探して何が悪い!??

02 準備して何が悪い!??

03 ホームを買って何が悪い!??

04 ダンジョン潜つて何が悪い!??

05 鍛治師雇つて何が悪い!??

06 魔法使つて何が悪い!??

07 喧嘩買つて何が悪い!??

08 ルール決めて何が悪い!??

# 酒を呑む前

## プロローグ

今日俺は死んだ…。

そう死んだ死んだのである…。  
いやまじで死んだ…。

死んだンスよ…。

しつこいつて、そりやーしつこくなるさなんせ死んだんだけ。死に  
そうとか、死にかけとか、死ぬ寸前とか、死の淵をさまようとかじや  
ないんだぜ。

死んだんだけ…俺…。

そんなこと思つていると少し疑問が湧いた。

死んだ俺がなんで今、物事を考へてるの？

状況確認のため周りを見回してみると、上下左右周りを全部真っ白  
な場所だつた。

「それにしても白い場所だな。地平線がきつぱり分からん？何処だこ  
こ？無限地獄？5億年ボタンの世界？こんな時は落ち着いてこの場  
所の端っこを探そうそうしようだから、とりあえず歩くか…。」

2・3歩、歩き出したら誰かに呼び止められた。

『これこれ、勝手に何処へ行く、そこの少年Aよ。』

声のする方に目を向けるとドラクエの神様みたいなじーさんがい  
た。

「ああ…………と…………ええ…………と…………ナンス  
カ…………。」

『なんじや、まだ混乱しているのか。なら自己紹介からするかの。』  
ワシは日本担当の神じやよ。』

(おい、この神様唐突に自己紹介始めたよ…。)

『何考へてるくらいワシには丸わかりじやからな。まあわかつて  
と思うが少年Aよお主死んだからの、転生してもらうぞ。だから、

このクジ引いとくれ〜』

どこからともなくクジが入った箱を出してそれを俺に向けてきた。流石に着いていけないので、少し尋ねることにした。

「あの、少し聞きたいことがあるんんですけど」

『すまんが、何も話せないの〜それが神のルールだからの〜。』

すげなく断られてしまった。

まあルールなら仕方ないか、ちょっと残念だけどそう思いながらクジを引いた。

『引いたのなんて書いてあるかね。』

自分が引いたクジを見てみた。そこには【大酒呑み】と書いてありそしてその下に【アタリ】と書いてあった。

「神様、引きましたけどなんですかこの【大酒呑み】って、それになんか【アタリ】と書いてありますけど何があたったんですか？」

神様に引いたクジを見せると少し驚いたような顔をした。なんかいいものでも引いたのかな？頼むそうであつてくれ！

『……少年Aよ【アタリ】を引いたか珍しいな、【アタリ】が出たらもう一回引けるからもう一度引くと良い』

心なしか喋り方が変わった気がする、こつちが素なのかな？少しうざかつたからいいんだけど……

言われるがままもう一度引いてみると、【星熊盃】と書いてありこれまたまたま【アタリ】を引いた。そしてクジを神様に見せると頭を抱えていった。

『少年Aよ、お前さんこんだけ色々あつてなんで2回とも酒に関わるものなんじや。その上また【アタリ】を引いておるし……これ何億分の一の確率かの？ほらもう一度引くが良い。』

もう酒関係が出ないようにするためかすごく振つてからクジの入つた箱をこちらに向けてきた。俺も少し楽しくなつてきてクジの箱に手を突っ込んでクジを引き、内容を確認したところ【蒸氣暴威】と書いてあつた。

『最後の最後で酒関係ないの出たの！まあ3回引く時点でおかしいのだがな、しかし今回用意した物の中には【スター・プラチナ】や【写輪

眼】や【ドラえもん】なんかを入れといたんじゃがな。お前さんは見事に数合わせのネタを引いたみたいだの、運が良いんだか悪いんだかよくわからないやつだの。それじゃ出てきた物の解説していくぞ。』

そう言つて手をパンと叩くと黒板みたいなものが出でてきた。どうやら今引いた物の説明をするみたいだが、俺が引いたやつ前半2つはよく分からんが最後に引いたのは知つてるぞ！ナルトのやつだ。確か2代目水影のちよび髭が使つてたやつだつたはず、水蒸気爆弾じやん！そんなのをどうしろと!?ああ…神様説明始めてるしほんどうじよ。

『それでは説明するぞ。

まず【大酒呑み】じゃかこれは読んで字の如し大酒呑みになる。そしてどんな酒をどんだけ呑んでも、テンションが上がるくらいで留まることができる様は泥酔することは無くなる。その関係で肝臓があれほど強くなる。ついでに毒と麻痺などの状態異常に耐性ができる。副作用として酒を呑んでテンションが上がりすぎると酒乱になる。

次に【星熊盃】は東方プロジェクトの星熊勇義の持ち物なんじやが知らんかの？知らんのそとかまあ良いが、これは単純な物でこの【星熊盃】に着いだ酒は1ランクアップする。副作用は特にないが【星熊盃】につぐものが無ければ意味はないその場合はやたらに丈夫なだけのただの盃だの。

最後に【蒸氣暴威】はさつきお前さんが考えた通り、ナルトの二代目水影である男が使つていた物だ。使い方は世界によつて違うから今説明するのはやめておこうかの。それとこの【蒸氣暴威】の弱点である術者が弱体化されるのはたまたま出た【大酒呑み】の効果で耐性ができているみたいだの。ほんとに運が良いんだか悪いんだか分からんの。

これで今回のクジの結果の説明は終わるが何か質問はあるかの？  
答えられる物ならば答えよう。』

質問特に思いつかないやでもこういう時は、適当でも質問した方がいいんだよな。

なんの質問をしようかと考えているとひとつだけ質問が浮かんだ

から聞いてみることにした。

「神様質問です。」

『なんじや申してみよ。』

「それじや質問なんですけど、これから俺は【大酒呑み】と【星熊盃】はともかくとして【蒸氣暴威】を使わないといけない世界に行くのですか？』

『それは、これからお前さんが自分で決めるのじやよ。決め方はもう何となく想像付いてると思うがクジで決めるぞ。』

そう言つて、俺の前に箱を出した。

『この箱の中にはクジの紙ではなく”鍵”が入つてゐる。その鍵を使つてこの扉を開けて転生するのじや』

神様がそう言い終わるといつのまにか扉がそこにあつた。いや、この例えは正しくない。この扉はずつとここにあつた、そう思えてならないほどの存在感を放つていた。ではなぜ気づかなかつたのか……。わからない……全くわからない……。

俺が扉をずっと見つめていると神様から『どうした？早く引かぬか』と言われ慌てて箱の中の鍵を一本適当に取り出し、俺は扉の鍵穴に鍵を差し込んだ。その時、神様が話しかけてきた。

『その扉を開けて気付いた頃には物心ついた年になつておるだらうから赤ん坊の時の羞恥とかはないから安心して良いぞ。あとワシ送り届けた子を覗き見るが趣味だから、たまにお前さんのこと見ておるぞ。まあそう言つてもプライバシーには配慮するから安心しておくれ。

では、行くが良い。』

最後にとんでもないこと言わわれはしたが神様からの激励に俺は一言「ありがとう」と言つて扉を開けた。扉が別世界と繋がつたことで一瞬目が開けられなくなるくらい眩くなり俺の意識はそこで途切れた……。

☆☆☆

神は少年Aが入つて行つた扉を眺めていた。

『やはり最近の子供は異世界転生に何の躊躇もないみたいだの‥。しかし先程の少年Aは最後に【蒸気暴威】を使わないといけないのか?』と質問していきおつたな。』

少年Aを送った神は”日本担当の神”であるつまり日本が今、他国に比べて平和でいい国にするために多くの力を使い尽力してきた。そんな日本から最近の子供は異世界に行くことを強く望み人生を終える前に、第二の人生を願い日々を自堕落に過ごしていく。

いや自堕落なだけならまだいいだろう。最近では第二の人生を願い”ワンチャンダイブ”などという行為をする者もいる。

神は平和を願われ平和を作つたが、残念なことに今の子供たちには平和な日本より刺激的な異世界の方がいいらしい。

そこで神はこのくじ引き異世界転生を作つた。

ある者はハーレムを求めて、

ある者は富と名譽を求めて、

ある者は犯罪を犯すために、

ある者は冒険を求めて

ある者は英雄になるために

ある者は少年Aのように成り行きで

神は1000以上の子供を異世界に送つたが、自分の願いがかなつた子供は10人もいない。異世界に送つた子供たちはどんな死に方をしても最後にこう思う。

『平和な日本に帰りたい』

神はこの言葉を聞くといつも思う。『異世界の扉を開きその旅路を選んだのはお前さんだろう』とそして神は先程送つた少年Aを思う。『面白いやつじやつたの』となんせ少年Aはここを地獄と言つたのだから、なんせここは子供たちを祝福してを送り出す場であると同時に生きて いるうちから第二の人生を願い人生を棒に振つた物たちに罰を与える場所なのだから。

扉を開けていった子供たちはもうどんなことがあつても日本に帰還することはできない。

そして、神が気まぐれにやつている”チート”のくじ引きはその使

い方と副作用も神はしつかり教えて送り出す。しかし子供たちの死因の約三割は自分の力を過信して使いまくつた結果訪れる死である。

【スター・プラチナ】だつた者がいたその者は、自分のスタンド成長に体が追いつかず【スター・プラチナ】に自分のオーラを吸われ尽くして死んだ。

【写輪眼】だつた者がいたその者は、戦闘のたび【写輪眼】を酷使し続けたそのため目玉は熱を持ち脳がその情報量と熱の前にショートを起こし脳が溶けて死んだ。

【ドラえもん】だつた者がいたその者は、ドラえもんを友達と呼んでも関わらず【ドラえもん】ばかりに面倒ごとを押し付け自分は遊び、湯水の如く金を使つた。【ドラえもん】はそれを知つた時、友達に裏切られたと激怒し未来に帰つた。自分一人では何もできないその者は何もできずに孤独に死んだ。

『あの少年Aは一体どんな人生を送り何を思つて死ぬのかの…。さて、そろそろ次の方が来る頃かの、切り替えて働くとするかの。』

神は少しだけ少年Aを思つたが、すぐに切り替えて次にやつてきた少女にクジが入つた箱を向けて同じことを繰り返していく。

☆☆☆

気がついた時、俺は1歳と半年だつたいやまだオムツなんだけど神様話が違くないか？

ヤバい漏れそうと思つトイレに向かおうとしたら、母親らしき人に抱きかかえられて、少しお腹を圧迫されたことによりゴールを迎えた。ガツテム

この母親なんか色々話かけてくれるのだかさつぱり何を言つていふかわからぬ誰か翻訳してくれ。

一歳半とゆうことで離乳食になつてゐるみたいだ…。母乳ではないのだ…。ガツテム

そういえば俺が神様に貰つたあの the 異世界特典みたいなはどうなつたのだろうか？正直少し気になるが俺の物は酒関係と水

蒸気爆弾である、当分は気にしなくても良いだろう。それにしても普段からまたもに使えるのが星熊盃だけである。ほんとに3回チャンスあつてなぜこのラインナップ？

とりあえず当分は言葉を覚えることに専念することにしよう。そ  
ういえば離乳はしたけどお風呂はマンと一緒だつたよやつたね!!  
?

☆☆☆

おひさ俺だ！

俺ももう3歳になつた成果としては言葉が分かる様になつたこと  
だ。どうやらこの言語は共通語（コイネー）というらしい。世界の共  
通語みたいで様は英語みたいな物だそうだ。

それと俺が生まれたこの場所は極東というそうだ。様はこの世界  
の日本のような場所だ。まさか異世界で米が食えるとは、米うめ、  
あ、そうそう俺の名前なんだかサカミチ・燕ツバメというらしい、なんか  
すんごく女の子の名前みたいだけど俺はしつかり男だぞ。TSとか  
してないからな！

ママンになんて燕つて聞いてみたら子供の時は親に頼りつきりで  
いいから、大人になつたら世界に羽ばたいて欲しいからという意味ら  
しい。想像以上にちゃんと考えてるな、マンつえパパンが考えた  
のソウスカ…。

☆☆☆

チヤオつす俺だ！

俺つてばなんだかんだで5歳になつた。そこでパパンがやらかし  
た話をしよう、結果から言うと、パパンは俺に酒を飲ませたのである。  
この俺の実年齢ならともかくこの燕の体はまだ5歳児であるすぐには  
酔いが回るそして発動しちやつたのである。言うまでもないだろ【大  
酒呑み】だよ。

いや発動しただけならまだいい、しかし副作用の酒乱の方が出ちやつたみたいで、後から聞いた話だと大人5人係りで押さえたらしい。ご迷惑おかげしました。

ちなみに、この時に星熊盃を出しちゃつて今はうちの神棚に置いてある。

シユールだ。

蒸気暴威は未だに使つてない、できれば使わなくていいと思う。

☆☆☆

こんちや俺だ！

あれから三年たつて8歳になつたぜ。最近知つたことを話すぜ。テンションが高いつてそりやそ�だ酔つぱらつてるからな！ H A H A

そこで最近知つたことなんだがどうも獣人やエルフやドワーフや小人なんかがいるみたい。今まで自分と同じヒューマンしか見てこなかつたからなかなか新鮮な気分だぜ。

なんで、こんなこといきなり話すかつて？

それは、この前來た商人のキャラバンにキャラットピープル猫人族やバルーム小人族の人�이て驚いている俺にママンが教えてくれた。世界は広いなくあと、体を鍛え始めた。

ちなみに俺の武器は槍になつたぞ、パパンは刀を使えよと言うのだがどうやら小手先の技は俺には合わなかつたみたいだ。槍で手数と力で相手を吹き飛ばす方が俺にはあつていた。いつそ棍棒でもいいやつて言つたらそれはやめろとパパンに言われてやめたぞ。

もう一つの武器は投げナイフだ。

ママンが教えてくれた物だが、それにしてもママン百発百中過ぎないですか。デビルメイクライみたいなスタイルリツシユさをママンの動きから垣間見たぜ！

☆☆☆

うーす俺だ！

10歳の誕生日を一週間前に迎えたぜ。一ヶ月前に俺の住んでるこのちつぽけな村に盗賊がきた。

どうやらママンとパパンの留守を狙つたみたいだ、こりやまずいと俺は盗賊が小分けになつてから物陰から奇襲して、盗賊をボコボコにして周つたら何とか勝てたみたいだ。

奇跡的に軽傷者は出た物の俺以上のがをした奴は居ないみたいだ俺は肋骨が折れた。痛くないが折れた時に呼吸ができなくなつた。ちなみにその時、助かつた2つ下の少女に抱きつかれたのだが、イタイすごくイタイカツタできれば離して欲しいのだが感謝を述べながら泣いてるのでどうしようも無く俺は諦めた。

☆☆☆

やあ俺だ！

11歳になつて、そろそろどこに旅に行こうかなと考えてたらママンがとある場所を教えてくれた。

ママン曰く、そこにはダンジョンなる物があるみたいだ。  
神々に恩恵ナルナを貰いダンジョンに挑む者は冒険者と言われ、その中からは英雄と言われる者も生まれるらしい。

英雄には、これっぽつとも興味はないが冒険者には興味がある。非常に興味がある。

俺は決めた！

冒険者になる。

来年、ここに行つて自由な冒険をするためにこの一年を準備に使い出来るだけの情報・金・力を身につける為にこの一年を使おうと先だって両親をどう説得したものかと思い話を切り出したのだが、両親拗つて二つ返事で許可が出た。マジで？

なんでもママンは10歳の時には一度は旅に出ていて色々な経験をしてきたらしい。俺はこの時に思つてしまつた。「ポケモンかよ」

とこう思つた俺は悪くない。

☆☆☆

さあさあ皆さんこの時が来たぜ！ そう言つてるのは誰かつてやつぱり俺だ！

この一年いろいろと準備をしたのだが結局、蒸気暴威はまだよくわからなかつた。フルナ恩恵フルナをもらえば使えるような気がしているので対して困つていなし問題はない。まあ、使おうと思つたことも無かつたけどな！

この日、俺は冒険に旅立つ楽しみなのが半分怖いような気がするのが半分という気持ちで12年世話になつた村を旅立つた。

俺の最初の格好なのだが、極東と土地柄なのか和服しかなかつたので村にくる商人に服を注文しておいた。上は長袖のインナーシャツにフード付きの前が閉まるタイプの羽織で下がカーゴパンツにブーツを履いている。

ぱつと見どう見ても極東の人間ではない。服装が違すぎる。

武器の槍に荷物や食料や金が入つた袋を括り付けて、投げナイフは羽織の内側に入れといた。ちなみに俺の星熊盃エボンマジックなのだが一度出してからしまう事ができなくなつてしまつた。ランダル破壊ランダル不可でもついているのかその辺の盾より防御力が高い、意味がわからんただの盃だろ？パンは装備魔法エボンマジックの魔道具マジックアイテムだの言つていたがよくわからん。あくまで俺の物であるため旅に持つていくとママンに言うとパパンは残念そうにしていた。こつそり俺の星熊盃で酒を飲んでいたようだ。基本的に星熊盃の酒は酒精も強くなるので持ち主の俺以外は飲めないのだが酒があまり強くないパパンはマンに使用を禁止されていたため説教を食らつていた。パパンも何気に図太い。

☆☆☆

あれから二週間が経つた。ひたすらに歩いて歩いて歩いて歩いた

(寄り道と道草をしながら) そして今日やつと俺はそこに着いた。その街に入るのには検問を受けて入らなければならない。

俺は人の列を見つけてそこに並んだ、その人の列は某ランドのスプラッシャーなマウンテンを思い出すほどの長蛇の列だつた。いや普通に考えて検問待ちとアトラクションの列が同じくらいってどうよ?

人によつてはなんか木製のフダを見せて列に並ばず入つていく人たちがいるがあれはファストパスかな?いや普通に通行証か。

そんなことを考えているといきなり俺の前に我が物顔で割り込んできた巨漢の男がいたので、「ちゃんと並べ」と注意したのだが。

「ああ!!?うるせえぞガキ!!?黙つて俺様に順番を譲りやがれ!俺は明日のロキ・ファミリアの入団試験の準備で忙しいんだ!目障りだからとつとと失せろクソガキ!!?」

この行為を検問の人はどう処理するのかな?とチラッと見たところ見てみぬふりをしていた。おそらくこんなことは日常茶飯事なのだろう。

俺はため息ひとつして、もう一度だけ忠告してやるかと思い「ちゃんと並べ、次はないぞ。」と少し脅す。

「クソガキが黙つて聞いてたら、俺様に命令してんじゃねえぞ!」

男は腰に下げていたご立派な剣を引き抜いた。流石に検問の警備の人もまずいと俺たちに駆け寄つてきていたが、その時には時すでに遅く剣は振り下ろされたが、俺はその剣を持っていた槍で横からぶん殴つて粉碎させた。そのまま男の鳩尾をぶん殴つて4・5Mほど吹き飛ばして気絶させた。周りから歓声が上がつたため俺もノリで高笑いをしていたのだがすぐ検問の人人がきて説教と厳重注意を受けた。解せぬ

検問自体はなんの問題も無く通過することができたのによかつたほんとよかつた。

こうして俺は遂にこの冒険者の街に来た

そう、此処こそが世界の中心と呼ばれ、稀に英雄が誕生する場所その名も

《迷宮都市オラリオ》

## 始まりの一杯

01 フアミリア探して何が悪い!!?

### 『迷宮都市オラリオ』

ダンジョンの周りにできた街であり、ファミリアに所属することで  
神々から恩恵（ナルナ）を子供たちに授け、そして恩恵（ナルナ）を与えられた子供たちのみにダンジョン攻略のチャンスが与えられ、英雄を目指し日々冒険をしていくその者たちを『冒険者』と呼ぶ。

以上、迷宮都市オラリオガイドブックより引用

☆☆☆

検問を抜けてオラリオの中に入り、すぐにギルドに向かいたいところだが検問で思いのほか時間がかかつたため今日はさつさと宿を取り休む事にした。

ありがたいことに検問の人（人）が宿について教えてくれたので、教えてもらった宿に一週間分の金を払い部屋でくつろぎながら酒を呑み明日のことを考えた。

「明日、とりあえず朝一でギルドに行つて団員募集ファミリアのリストもらいに行くか。そういうや検問の場所で殴った男が明日ロキ・ファミリアの入団試験があると言つてたな！」

ロキ・ファミリアこのオラリオの中でトップ2に入るファミリアであり、フイン・デイムナを始めとした第一級冒険者が多く所属しているファミリアであり、主神のロキは無類の女好きと有名なファミリアである。

「正直言うと、零細ファミリアでもいいんだよな。下手な大手ファミリアに入るより自由がきいて楽しそうだしな。冒険者やるんなら自由じゃなきゃ意味がないしな」

酒を呑みながら明日のことを考えようとしたがいい感じに酔つ

払ってきたので考えるのをやめた。酒うめく  
用意した酒を全部を飲み干して今日は寝た。

☆☆☆

朝早く起きてギルドに向かつて歩いているといい感じの飯屋？酒場？を見つけた、名前を『豊穣の女主人』と言うらしい。看板にそう書いてあるから多分合っていると思う。なんとこの酒場朝と夜にやつてるみたいで、ギルドのからの帰りに寄つていくこととしようこうしよう。そう思いギルドに向かつて歩き始めた。

ギルドのカウンターにいる受付嬢に入団募集しているファミリアの一覧を貰った。

「こちらが、今団員募集しているファミリアの一覧です。ちなみに今日の午後の3時からロキ・ファミリアの入団試験がありますよ。」

受付嬢もどうやらロキ・ファミリアはおすすめらしい。

「ありがとうございます。ロキ・ファミリアの入団試験受けに行ってみます。」

受付嬢に社交辞令のようなお札を言つてギルドを後にした。来る途中で見つけた『豊穣の女主人』に足をすすめる。ハラヘッター店について中に入ると朝早いのにもう店は賑わっているようで結構な数の客がいた。

「ニヤーー名様ご案内にやーー

そう言われるがままに猫人族キャットビーグルにカウンターへ案内され、メニューを見て飯を決めていると、まさにこの店の首領みたいなでかいドワーフの女性が「あんた、見ない顔だね」と話しかけて来た。

俺は昨日この街に来たと店主に言うと少し店主が眉を顰めた。

「お前さん、入団募集のリストを持つているところを見るとまだファミリアに入団していないね。ちゃんと食った分は払えるだけの金はあるんだろうね？うちはツケはやつてないよ。」

ワントーン下がった声で言われた言葉に若干ビビりながら、金はあるから問題ないと告げ朝飯と飲み物を注文した。

「そうかい、疑つて悪かつたね。それならしつかり食つて金を落としていきな！」

店主はそう言うと笑いながら仕事に戻つて行つた。マジで怖かつたぜ

少し待つと飯と飲み物が運ばれて來た。美味そーっと飯を食べようとするとき金髪で緑眼の身長も胸も小さい幼女が入ってきた。小人族かなと思つていると幼女は倒れた、慌てた様子でウェイトレスの人間族の少女が駆け寄つたと同時に、「ぐううー」と盛大に腹の音が鳴つた。

「腹減つた、この金でご飯食べさせてくれー」

幼女は金が入つてゐるであろう袋をウェイトレスの少女に渡していた。

美しいくらい the 腹の音つて感じの音だな随分と腹減つてるんだな…。いやそんなことはどうでもいいか今はこの飯を食うとしよう。

この店は値段はかなり割高だが、味と量共に申し分ないな！うまうま

飯を食べ終えて、飲み物の残りを飲んでいるときに入団試験のリストを眺めていたら、さつきの幼女が俺の隣で飯をガツガツ食べていた。

「飯うまー！飲み物もうまいな！……ングングング……ふはー!!?」

この幼女随分いい食いつぶりだなんだけ腹減つてたんだよ。子供の腹減りなんて世も末だな、いや小人族かもしれないけどなどゆうか精神年齢ならしつかり大人だけど俺も見た目だけならまだ子供だけだ。まだ12歳だぜ俺

「ロキ・ファミリアの入団試験まで、まだだいぶ時間あるからなどどうしようかな。」

誰にも言うわけでもなくそんな独り言を呟いたら

「おいお前、ファミリアを探してゐるのか!!?」

隣の幼女に絡まれた、朝から酔つ払つてゐるかコイツ俺だつてまだ

飲んでないのに…。（ロキ・ファミリアの入団試験があるからである。普段ならもう飲んでる。）

俺がなんだコイツと思つていると幼女が言つた。

「私はトール雷神トール様だ!!?」

なんとも、まあ誇らしげに言つてるけどトールねえ雷神トールと言えばあの北欧神話の神話体系の頂点に位置する神様だろ、北欧神話をほぼ知らない俺でも知つてるとこイツは巨人社長などころかちつちやいよな？それに巨人と聞いたぞコイツは巨人などからかつてやるかね。悪意は無いぞホントだぞ

「ライジン・トゥルね名前が下つてことは極東の出身だな、だとしたら同郷だな。」

「いや私は極東の出身じやねーし!!? 神だ!!? 神様だ!!?」

俺のボケにキレのあるツッコミをするトールと名乗った幼女、この幼女が言つたことが本当ならコイツが神になるわけだがホントに？この幼女からは威厳もなんも感じないけど？

「とゆうかお前、極東の出身なのか？見た目からはまるでわからんが？極東といえばアレだろ着物とか言うやつだろお前はそれを着ないのか？ん~？」

どうやら少し極東の知識があつたらしく腕を組んで「おかしいな」と唸つていると咳払いをして少し真面目な顔をした。いろいろ忙しい奴だなコイツ

「お前、私のファミリアに入らないか？さつきロキ・ファミリアの入団試験を受けると言つていただろう！あらためて私はトールだ。お前名前は？」

ファミリアへの勧誘を受けた…。朝飯をたまたま食いにきたところでマジで…。とりあえず名乗られて名乗らないのは良く無いよな。

「俺はサカミチ・燕だ。いやこの町では燕・サカミチかな？さつき言った通り極東の出身の人間族だ。」

「そうか燕か良い名前だな。それで私のファミリアに私の眷属にならないか？」

ファミリアの勧誘か悪くない話ではないが、でも今初めて会つたそれも何の素性もわからない奴勧誘するか？人員不足か？いや貰ったリストにトール・ファミリアなんて名前はなかつたから何か訳ありか？

「燕、お前はなんで今初めて会つたやつを誘うのかと考えているだろう。」

まさにその通りなので俺は少し驚いた。

「この際だから言つてしまふと、私には眷属はいないしホームもない金もないそんな零細ファミリア以下のファミリアだ。それでも、いいといつてくれるなら私の初めての眷属になつてほしい。」

俺の目の前にいる神には、今は何もない仲間も金もホームも多分情報もそんな何もない神なんだろう。何もないゼロから始まるファミリアか。

「なるほどな、トールお前にはホントに何にもないんだろう。。。酒場で会つただけのガキを勧誘しなくちやいけないくらい切羽詰まつてのもわかる普通に考えて所属する理由がないな。」

俺の言葉にトールはまたダメだったかと下を向いた。俺はそんなトールに続けて言う。

「ゼロから何もない所からのスタートか。。。面白そうじやないか！！？」

思いがけない言葉にトールは驚いて顔を上げる。

俺はニッと笑つてトールの方を向いた。

「俺は大酒呑みで酒乱だそして極東育ちの世間知らずだしな、何もないのは俺も同じだ。」

「それって……どうゆう事……？」

トールは混乱しているが、気にして続ける。

「トール俺をお前のファミリアに入ってくれ。いや、ください？敬語つて好きじゃないんだよな。」

「いや、敬語なんていらないさ！今日から燕お前は私の眷属だ！やっぱ無しは無しだぞ！よろしくな!!？」

ニッとトールも笑い晴れて俺のトール・ファミリアへの入団が決

まつた。

「よし、トール今日はもういいよな！呑んでいいよな！ロキ・ファミリアの入団試験行く必要無くなつたしな！」

「ああ!!?構わないぜ!!?今日は盛大に盛り上がりよう!!?」

さつきまでのヘニョヘニョだったのが嘘みたいに元気なトールはなつた。店主にあらためて酒エールを頼み俺とトールに運び込まれた。

「トール・ファミリア結成と、これから始まるに冒険に乾杯!!?」

俺がそう言うとトールが続けて「乾杯!!?」と言つて、いつきに半分まで呑み俺も負けじとほとんどの酒エールを飲み干した。そのまま次の酒を頼みトールにこれからのことを見く。

「トールはホームを持つてないんだろどこに住んでるんだ？」

「私は今、パン屋でバイトをしながら、格安で下宿してる。燕は今どこに住んでるんだ？」

神でも、生活のためにバイトするんだな驚いたぜ。

「俺は昨日このオラリオに来てな。検問の人�が教えてくれた宿に泊まつてる場所はここからそんな遠く無いぞ。」

俺はここに来るまでの話をした。トールは下界に降りてきてからオラリオを出たことがなかつたらしく楽しそうに聞いていた。俺も楽しくなつてきて、五杯目を頼もうとしたら「朝からそんな飲むんじや無いよ。これ以上飲みたいなら夜に来な！」と言われたので渡々中断した。

ちなみにトールはまだ2杯目半ばくらいだった。最初の勢いはどこ言つた？

「ホームか燕はどんなホームがいい？」

突然、トールがそんなことを聞いてきたので、「それは今のことか？後のことか？」と聞くと

「当然未来のこと！と言いたいが、今は私たちには金が無いしな。悔しいが今のことで頼む。」

トールもだいぶ酔つてきたようだ、わかりやすく悔しがつている。いや、もともとわかりやすいんだな。

「俺的には、ボロくても小屋でもいいからホテルや下宿じゃなくて、

トール・ファミリアの家<sup>ホーム</sup>と言える場所がいいな。」

「私もその意見に賛成だぜ！ヘファイストスにでも格安の物件を斡旋してもらえるように頼んでみるぜ！ついでにヘスティアに自慢してやろう。ニッシツシ」

「ヘスティア誰だそいつ、お前の神友か？」

「そうだぜ、もつと言うと私と同じ眷属<sup>フアルナ</sup>がいない無名の神だぜ。どんな顔するかな想像するだけで笑えてくるぜ。」

「まあその辺はどうでもいいや、あらためてこれから頼むぜトール。最後に残りの酒を飲み切って、「さてと」とトールは立ち上がった。俺はいきなりどうしたんだと思ったが、それと同時に「それじゃ、恩恵<sup>フアルナ</sup>を授けるから行こうぜ。」と言った。

☆☆☆

俺とトールは金を払つて、俺の泊まつている宿に来た。そこで恩恵<sup>フアルナ</sup>を貰うみたいだ。

「じゃあ恩恵<sup>フアルナ</sup>を授けるから、上着を脱いでベッドにうつ伏せになつてくれ。」

俺は言われた通り上着を脱いでベッドにうつ伏せになつた。

トールは指を針で刺して一滴だけ背中に血を垂らした。

「はあああああーー＝？」

俺の初期ステータスを見てトールは絶叫した。

どうしたんだよ俺からは見えないから、よくわからないんだぞなんだそんなにショボかったのか？ そうなら体は結構鍛えてきたから何気にシヨツクなんだけど。

「な、なんだこれ、燕お前はその年までに一体なにをしてきたんだよ…。」

明らかに、何か同様している。ホントに忙しい奴だな

「燕正直に言つてくれ、今までにどこかのファミリアに所属した事はあるか？」

そんな事を聞いてきたので、「いや、恩恵<sup>フアルナ</sup>を貰うのは初めてだが？」

と返事をしたがどうしたんだ？

「嘘では…無いね、下界の子供達は神に嘘はつけないからな。つまらない事を聞いたな！」

「いや、構わないがどうしたんだ？」

「その話をする前に、燕お前のステータスを見てみてくれ。」

トルはステータスが書かれてる紙を俺に渡した。

燕・サカミチ：L v. 1

【アビリティ】

力	：S	：999
耐久	：S	：915
器用	：G	：250
敏捷	：B	：723
魔力	：H	：150

【魔法】

【蒸気暴威】

- ・人差し指と中指を二本立て念じる事で使用することができる。
- ・発動時、術者を中心にも水蒸気爆発が起き、術者の半分の大きさの分身を作る。この分身が動く又は、熱せられることで体積が膨張していき再び分身を中心に水蒸気爆発が起ころる。
- ・爆発する回数、大きさ、威力は込める魔力によつて変わる。
- ・【蒸気暴威】による水蒸気爆発のダメージは術者には無い。

【

【スキル】

【大酒呑み】

- ・大酒呑みになる。

- ・どんな酒をどれだけ呑んでも、テンションが上がるだけで泥酔することも中毒になる事も無い。

・酒乱になる。

・体が強くなる。

・耐性がつく。

### 【星熊童子】

・星熊盃で酒を呑むと経験値獲得。エクセリア

・酒乱時、獲得経験値上昇。エクセリア

・酒乱時、身体能力上昇。

・酒を嫌いになるとこのスキルは消滅する。

「これは、なかなかのステータスだな！今までの努力は無駄じやなかつたな。ステータスから呑んだくれ臭がすげーけどな。」「いやいやいや!!？」努力じや無理だから、普通初期ステータスは高くてもトータル500くらいが最大値だから!!？前代未聞だから!!？」「まあそんな事はいいじゃねーか。今大事なのは俺がお前の眷属である事だろ、それに強いならそれに越した事ないじゃないか。何事も初めては前代未聞なものだ！」

「なに、こんな時にちよつとした名言を作っているんだよ。」

「そんな事より、恩恵フルナも貰つたし呑み直そうぜ！星熊盃使わせてやるから」

「そりや、ステータスにもあつたけど星熊盃ってなんだよ。」  
俺は星熊盃と普通のグラスに同じ酒を注いで、普通のグラスを渡した。

「この酒は極東でよく呑まれる大吟釀という酒で、米のジュースみたいで呑みやすいぞ。呑んだ事は？」

「ありがとう、聞いた事はあるけど呑んだ事はないな。」

トールは一口呑んだ。

「うまいけど、エールみたいに流し込む事はできないなこれ。」

「そりや、エールに比べたら酒精が強いからな。それじやその酒の味は覚えたな、次はこの星熊盃に入つた方を呑んでみてくれ。」

言われるがままにトールは星熊盃の酒を呑んでいくと、「ふはー」と言つて一気に呑み切つた。

「なんだこれ、うまい、ちよーうまい……なんでだ？これ同じ酒だろ。」

星熊盃は酒精も強くなるのでしつかり出来上がりっていた。

「これが星熊盃の効果だ。この星熊盃に注がれた酒は1ランクアップするそんな効果があるただの盃だ。」

「こいつは魔道具<sup>マジックアイテム</sup>だよな？どこでこんなもん手に入れたんだ？」

別世界の神様に貰つたとはいえないよな、だけど嘘はバレるみたいだしな。

「これはやつぱり魔道具<sup>マジックアイテム</sup>なんだな、実家の神棚に置いてあつたんだ。」「代々、引き継いでいる物なのか？」

「それはどうだろうな、大事にしろとかは言われて無いしでも父親はかなり大事にしてたな。」

トールは、「そうか」と一言言つて、また星熊盃に酒を注ぎ込んでいく。どうやら誤魔化せたようだ、まあ嘘は言つてないからな。バレなくてよかつたー

「どうでこれ私にく「だめだ」れえ……。即答かよチクシヨウ。」

ここにトール・ファミリアは旗揚げをした、これから先『サカミチ・燕』がどんな冒險をするかは誰にも分からぬ。

そう……誰にもね。

## 02 準備して何が悪い!??

おはよう!!?

ナル

昨日、トールから恩恵を貰い、晴れて新米冒険者になつた俺だ!!?  
今日は、ギルドに冒険者登録をしに行くぜ。

荷物を持つて、昨日呑みすぎて二日酔いになつて「ああー！ううー！」と唸つて、昨日を横目にギルドに向かうとしよう。行つて参る

どうやら俺の泊まつている宿からギルドに向かう道には多く屋台が並んでいるみたいだちようど腹も減つていたしなんか食べるかね。屋台を物色していると『じやが丸くん』の屋台を見つけた。

いや、じやが丸くんって何? コロッケと何が違うの?しかし興味はある!かなりある!よし食おう

「おばちゃん、じやが丸くん一個おくれ!」

「いらっしゃい、味ば何にするんだい?」

まじかよ、じやが丸くんって味に種類があるのかよ。えーっと、ん? プレーンってのは塩だよな。それはわかるけどなんだ小豆クリーム味つて、抹茶なんかあるのか。

俺はこうゆう時は王道のプレーンを選ばない!それが燕さんクオリティ!だけど小豆クリームに手を出せるほど勇気も無い、だからこそ!

「おばちゃん、じやが丸くん抹茶味くれ。」

「毎度あり、40ヴァリスだよ。」

ヴァリスは、この世界の通貨で俺の感覚的には10ヴァリス100円つて感じだ。

因みにじやが丸くん抹茶味は結構美味かつた。。。次は小豆クリーム味に挑戦してみ……やっぱ、プレーンにしよ。。。逃げて無いよほんとだよ

☆☆☆

食べながら歩いているとすぐにギルドに着いた。

前も思つたけどギルドの扉こんな吹きさらし状態で、防犯耐性大丈夫なのかな？

ギルドに入り日本人特有の受付に行つてキヨロキヨロしてると昨日、リストをくれた受付嬢のおばちゃんが来てくれた。受付いつつすぐ人来てくれないと心細く無い？俺だけかな？

「おはようございます。本日はどのような御用件でしようか？」

前も思つたけど、どう見てもガキの俺にちゃんと敬語を使うんだな、仕事が出来そうな人だ。

「ファミリアに入ったので、冒険者登録をお願いします。」

そう言うと、すぐに登録するための記入用紙を持ってきた。

「こちらの記入用紙にお名前、年齢、L V：所属ファミリアをお願いします。」

言われた通りに記入用紙を埋め終えて記入用紙をおばちゃん返す。

「名前は【燕・サカミチ】年齢は【12歳】L V：は【1】所属ファミリアは【トール・ファミリア】ですか、お間違ひありませんか？」

俺がおばちゃんに「大丈夫です」というと、おばちゃんはテキパキと慣れた手つきで作業していく。手際いいな結構長く勤めているのかな？

「トール・ファミリア、新しいファミリアで間違いありませんか？」

俺が「そうですよ」と答えると新しいファミリアはいろいろ説明をしなくちゃいけないから時間をもらうと言うので、俺はそれを了承した。

そこで、昨日の口キ・ファミリアの入団試験がどうなつたのか気になつたので、おばちゃんに聞いてみた。

「昨日の教えてもらつた口キ・ファミリアの入団試験つて何人受かつたかって知つてます？俺、昨日入団試験に行く前にトールのファミリアに入つたので、詳しく知らないんですよ。」

「そうですか、入団試験前にファミリアに入つたんですね。道理で…。」

「なんか、あつたんですか？」

「いや、何かあつたわけでは無いですよ。」

「ん？」

どうゆう事だ？何も無かつたのにその反応はおかしく無いか？そんな反応されたら何かあつたと言つてる物だぞ。

「実は昨日の試験受験者数は100人超えてたらしいんですよ。」

100人!?流石はオラリオ1、2を争う派閥、受ける人数の桁が違うな。あれ？ちょっとまで、試験受験者人数”は”って事はあんまり受かつて無いのか？

「受けた人数は100人と多いんですが、合格者人数は”0人”だつたみたいでそのほとんどの試験受験者は心が折れてオラリオを出て行つたみたいんですよ。」

マジか……え、そんなに口キ・ファミリアの入団試験つて厳しいの？その上、心を折られたつてマジかよ。受ける前にトールに会えてよかつたよ。今夜は一杯奢ろう

俺は、書類関係を一通り終わらせてからおばちゃんの初心者冒険者としての有り難いお話、次にファミリアとしての有り難いお話。正直ちょっと疲れたが真面目に聞いた。俺は集められる情報は集めるタイプなのである！

こちらからもいろいろ聞いて、多くの情報を聞いた。例えば、ダンジョンの階層やモンスターのこと、バベルにはヘファイストス・ファミリアのお店があつて上級冒険者用の装備から名前を売りたい新人鍛治師の作品なんかもあるらしいこの情報はでかい。あと酒や飯のうまい酒場の一覧。ありがてー！

おばちゃんに「今日からダンジョンに潜るんですか？」と聞かれたけど、俺は「3日後から潜る」と言つたら驚かられた。理由を聞かれたから、「街の構造を覚えるのとダンジョンに潜る準備をしたいから」と答えたら驚かれた。なんでも若い新人冒険者は何も考えずダンジョンに突っ込んで行つてしまふからだそうだ。何も考えずつてマジよ…。

新人冒険者セットはいるかと聞かれたが、内容を聞くと大した物が

無かつたのでいらないと答えた。なんだよナイフって剣ですら無いのかよ…。

ダンジョン探索アドバイザーと言う人がいるらしい、用はギルドの職員がダンジョン探索の為のアドバイスをしてくれるみたいだ。俺のアドバイザーは今年はこの仕事ができるおばちゃんがしてくれるみたいだ、なぜ今年はと言うと来年は退職するみたいだ。何故かはしらん

おばちゃんにバベルに行つてみると言つてギルドを後にした。

☆☆☆

### 『バベル』

ダンジョンの上に建てられたやたらとでかくて高い人工建造物で、なんとこんなものを1000年前の建築家が作つたみたいだ。東京タワーが可愛くなるくらいデカくて、サクラダファミリアのように細部をこだわっているのに本当か嘘かダイダロスという建築士が一世代で創り上げだという話だ。因みにダイダロス通りと言う場所がオラリオにあるが、その名の通りダイダロスが創つたようだ。ダイダロス凄すぎだつてばよ

因みにバベルには入るのが初めてで、この塔を階段で登るのかとちよつと絶望していたのだがどうやらエレベーターがあるみたいだ。ホントダイダロスすげーな。

エレベーターでヘファイストス・ファミリアのお店がある階に、行つて武器や防具を見ていたのだが、流石は上級冒険者装備だな値段も上級冒険者だぜ。詳しく言うと安くて数百万高いものになると億なんて物もある。いや、こんなのは高すぎて逆に戦えないぜ…。使い捨て覚悟の投げナイフ一本が3000ヴァリスつてどうよ…。

お目当ての新人鍛治師エリアにきた。  
なるほど、すげー安い！

いろいろ見て回つたら、掘り出し物なんかがあるかもしれないな。俺の武器は槍と投げナイフだから槍はともかく投げナイフはいいの

があつたら買つていくか消耗品だしあつて困る事はないだろ。

あと鎖帷子くらいは買つておくか。

あとは……やべーなこれといつて思いつかない。とりあえず、見て回つて良いものがないか調べてみるか。

俺は店の端つこの人の少ない場所に行つて、武器や装備の物色を始めた。

俺の経験上、掘り出し物は意外と隅つこにあるつてアニメで見た。どれどれなんかないかなー

そんな中に槍が一本あつた。

どこから見ても普通の槍だ、それこそ俺が使つている格安の槍と見た目はほぼ変わらない。その槍を手に持つて明らかにおかしい事に気が付いた。重い、重すぎる。

細かくはわからないがこの槍は少なくとも俺の体重より重い。戦斧や薙刀のような力を重要視する武器はやたらと重い事があるが、槍は違う。どちらかというと中間距離をスピードと手数で戦う武器である。

俺みたいに、『力』のアビリティが高くて槍を使う奴なんてまずいな

い。

この槍は長さは2 M<sup>メドル</sup>で竿が太すぎる訳でも無い本当になんの変哲も無い槍であるが、体感的には60キロはある。

俺の記憶が正しければ、三国志最強と言われた呂布の薙刀が40キロだと言われている為、この槍の異常性がよくわかる。

一体、何を使つたらこんな重くなるんだよ……。とゆうか誰がこれを使うんだ？俺みたいに『力』が高く無いと持ち上げて振り回す事はできないだろ……。こんな端つこにあるつて事は初心者鍛治師が初心者冒険者向きに作つた物だろ……。単純に失敗作か？

いや、その割には重さ以外はいいできだ、バランスもしつかりして

いるし歪んでる訳でも無い。

何を思つてこれを作つたんだ？

こんな色物みたいな槍、俺以外のやつは使わないだろ。

そう俺以外は。

俺はこの槍が気に入っていたむしろ重い事は俺にとつて喜ばしい事だ。なんせ子供ころに棍棒を使いたいと思つたくらいだ。

値札を見ると2000ヴァリスと格安だつた。

俺の使つてる槍は村に住んでる時に村に来る商人から買つた一番安い槍だ、それでも3000ヴァリスはした。それより安いなんてマジかよ

値札に、製作者の名前と思われるものが書いて合つた。

「ノラ・ゾーナ」

このノラつて名前の鍛治師が作つたみたいだな。

人のことは言えないと、名前からじや男か女かわからないな。

俺的には有り難いが槍一本2000ヴァリスか、生活できてるのか

?

それとも普段は、ダンジョン探索で生計を立ててるのかな?

まあいやこの槍と適當な鎖帷子と投げナイフを持つて会計しに行つた。

全部でいくらかと聞いたら店の親父に

「お前さんこの重いだけのポンコツ槍を買つていくのか? 変わつた奴だな。」

「俺が、この槍を買う事になんか問題あるのか?」

「いや、金さえ払えば問題ねーよ。変な奴だとは思うけどな。」

変な奴だと言われてしまつた。侵害だな! ちょっと変な槍を買うだけだろ。

「この槍は、他の槍に比べてやたらと安いけど製作者つてどんな奴なんだ? 知つてたら教えてくれよ。」

「コイツは売り出した当初はもつと高かつたよ、だけど全然売れなくてな値下げして端っこに放置してたのさ。」

「いくらだつたんだ?」

「元々の値段か、俺の記憶が正しければ確か2万ヴァリスだつたな。」

9割り引きかよ。どんだけ売れなきやそななるんだよ!

「コイツを作つた奴は、ヘファイストス・ファミリア内で能面ちびつて呼ぶてるLV. 1の小人族だよ。」

このおっさん、随分そいつの事を知ってるな有名なのかな？

「随分と詳しいが有名なのかな？」

「ああ、悪い意味でだがな。この槍を見た通り使えない物を作るつて有名な上あいつ自身も変な奴だからファミリアで浮いてるしな。」

「そうか、教えてくれてありがとよ。」

金も払つたし買った物を置きに宿に戻る事にしよう。

☆☆☆

バベルを出て宿に着くとすっかり夕方になつっていた。

荷物を置きに宿に戻ると俺の部屋にトールがいて大量のパン食べていた。

バイト先がパン屋と言つていたし多分売れ残りを貰つてきたんだと思うけど、それにして多く無いか？トールお前その体で実は大食らいなのか？

「おかえり～。今日、バイトしてる時にさ店長に眷属ができたつて話したら、お祝いにつてこんなにパンくれたんだぜ。流石に私だけじゃ、こんなに食えないから燕も食え!!？」

そういえば、朝にじやが丸くんを食べてから何も食べて無いな、見た感じ食パンだけじや無くて菓子パンや惣菜パンもあるな。

その中に俺はある惣菜パンを見つけてしまつた。そうこのパンなのにあげて作る為にテカテカしてゐるこの見た目、そして食欲をそそるスペイスの匂い！間違いないこれは『カレーパン』である!!？

俺はカレーパンを手に取つて一口食べると「うまい！うますぎる！」とこの世界に来てから初めて食べるカレーパンに12年ぶりに食べるカレーパンに歓喜していた。

「それは、うちの店長が作ったカレーパンだぜ。オラリオでうちのパン屋しか売つて無いんだぜ。うめーだろ。」

トールはクロワッサンを食べながら、自慢げに言つた。いいのか神様それで

「そういうや、その槍は新しい槍か？バベルで買つてきたのか？」

「ああ、ギルドで新人向け防具を売つてる場所を教えてもらつたんだ。  
この槍は変人の小人族パルウムが作つたんだよ。」

カレーパンの食べ終えて、次のパンに手を伸ばした。

「変人ね。」

「俺が思うに、このオラリオで一旗あげようつて奴にまともな奴つて  
いるのか。変人ばつかだろ。まあ俺はこの街に来て、3日目だからあ  
んまりでかい事は言えないけどな。」

「いや、私もそう思うぜ。多少はイカれてないところぞつて時に使い  
物にならなくなるしな。その点、燕は合格だな！ 面白そうで私の眷属  
になつたんだ、どう考えてもイカれてる。」

自分の眷属にイカれてるつて主神の言う言葉かよ…。

「いや、だつてそうだろせつかく冒険者するんだ面白くなきや意味が  
ねえだろ。」

そんな話をしていたら、トールが忘れてたとばかりに話をしてき  
た。

「そういうや、燕のステータスについて少し考えたんだ。」

「考えたつて何を？」

「何をつて…。今後、どうするかとか何故燕のステータスは異常に高  
かつたとかな。」

俺のステータスについての話か、俺としてはあまり触れてほしく無  
いけど今後に関わる事だからなやむ終えないか。

「まず、燕のステータスが異常に高かつた原因は燕のスキルにあると  
思う。ステータスって言うのは、その人の人生そのものだ。つまり、  
意外と知られてないが恩恵フルナを与える前に、魔法やスキルを持つて  
いる事がある。魔法に関しては魔法と親和性が高いエルフにたまに  
ある事でそれ以外種族に起きる事はほぼない。燕は蒸氣暴威ジョウキボーウィが出て  
た、これは昔から使えたのか？」

「いや、俺の人生で魔法が使えた事は無いな。両親も魔法が使えるな  
んで聞いて無いし、ましてやエルフとはなんの関係も無いな。」

トールは「そうか」と言つて、腕を組んで悩んでいる。コイツは悩  
み時、腕を組むんだな

「まあ、そつちはついでだ。昨日は、ステータスの数値に目が行つて気づかなかつたけど、このレアスキルだ。【大酒呑み】はともかくとして、問題はもう一つのスキルの【星熊童子】の方だ。このスキルは制限はあるが経験値<sup>エクセリア</sup>を取得する事と上昇させる事ができる。もしこのスキルを燕が酒を飲み始めた時か鍛え始めた頃に既に獲得していた場合、納得できるんだがどうなんだ？ 実際、昔から大酒呑みで酒乱だつたんだろう？」

そのトルルの考察に俺は舌を巻いた。

実際5歳の時には【大酒呑み】が発動していたし、その時に星熊盃を出したんだよな。確かに、冷静に考えたら俺のステータスは高いんだよな。

「確かに、昔から大酒呑みで酒乱だな。細かく言えば、5歳の時に父親に酒を呑まされた時からだな。そういうえば、父親の話では俺が初めて酒乱になつた時は大人5人で抑えたつて言つてたな。」

トルルは「やつぱりか」と言つて俺のステータスが書いてある紙のスキル欄<sup>フルナ</sup>を指した。

「つまり、恩恵<sup>エクセリア</sup>を刻んで無い人に入る経験値<sup>エクセリア</sup>はたかが知れてるけど、このスキルで多少上乗せされその上、星熊盃<sup>エクセリア</sup>で酒を呑んで経験値<sup>エクセリア</sup>が追加されてこれが貯まるに貯まつて7年分の恩恵<sup>エクセリア</sup>がこのステータスだとしたら……このステータスでも納得がいく。」

「なるほどな、俺のステータスにそんなカラクリがあつたなんて驚きだぜ。つで今後はどうするよ。」

「とりあえずは普通の初心者同様上層で経験値稼ぎをしてくれ。とりあえず一ヶ月は、主神権限で5階層より下に潜るのは禁止する事にするぜ。燕が目立ち過ぎて他の神どもに目をつけられたく無いからな。」

俺としては一ヶ月もかよと思つたが、主神権限なら仕方がないかと了承した。

「それと、ヘファイストスに家<sup>ホーム</sup>を斡旋して欲しいと今日会つた時に頼んだら、明後日なら時間があるから来てくれって言つてたから、明後日会いにいくぞ。」

ヘファイストス様か……【ノラ・ゾーナ】についてついでに聞いてみるかな。やっぱり様をつけなきやダメなのかな。

そう思いながら俺は、酒を星熊盃に注いで今日もやっぱり酒を呑む。あれ星熊盃トールに取られたんだけど……。

## 03 ホームを買って何が悪い!?!?

冒険者に取つて、必ず必要なものであり自分の命を預けるものそれが『《武器》戦いの中でコイツが壊れる事は、絶望的な状況だと言えるだろう。

そんな武器を作る事をメインにしている大手ファミリアそれが【ヘファイス・ファミリア】である。他に鍛冶メインだと【ゴブニユ・ファミリア】などもあるが一見さんお断りであるため俺には関係ない。

その、ヘファイス・ファミリアの家に俺とトールは来ている。ん? 昨日はどうしたかつて、特に言う事ないぜ。せいぜい【ミアハ・ファミリア】でポーションを買ったことと、ノームの爺さんがやつてる道具屋で研ぎ石と【ソーマ・ファミリア】の酒を買つたくらいだ。マジで高かつたー

「なあトール、ヘファイス様つてどんな神なんだ?」

「ヘファイス・ファミリアはいい奴だよ。天界でも神格者つて有名だつたし、何より天界からの神友つてだけでヘスティアを居候させてるくらいだ。」

「それ、神格者と言うよりダメ人間製造機なんじやねーの?」

「ブハッ!!?」

俺の指摘にトールは吹き出した自分でも少し思っていたのだろう。「あのヘファイス・ファミリアが…ダメ人間製造機つて!!? フフフ!!? あの天界の神匠ヘファイス・ファミリアが!!? ダメ人間製造機!!? ヒツ!!? フハハハハ!!」

どうやら、完全にツボに入つたようだ腹を抱えて笑つていて。おいおいこれから頼み事をする人を笑うんじやねーよ。

そこに、俺たちが待機していた部屋に一人の女性が入つてきた。正確に言うと女神であるが、ヘファイス・ファミリア様つて女神だつたのかよ。まあ、トールも女神だし今更なんだけど

見た目は赤毛に顔を半分くらい覆う眼帯を付けてスーツを着ている。うちの主神と違つて仕事ができそうだ。

「さて、貴方がトールの眷属になつた子ね。私はヘファイストス。この【ヘファイストス・ファミリア】の主神をしているわ。ところでなんでトールは笑い転げているの？」

「はじめまして、俺は燕・サカミチといいます。トールが笑い転げているのは気にしてください。そんな事より家の話なんんですけど、何処かいい場所は無いですかね。予算はこんなものでおねがいします。」

金が入つた袋を机に出して、ヘファイストス様に聞いてみる。

「そうね、この予算だと都市街から少し離れるんだけど、ここはどう？元々は、宿屋兼酒場だつたから、現状二人だけなら広過ぎず狭過ぎないし、ファミリアの規模と予算的には合つてると思うけど？まあ対して管理をしてきていないから部屋は埃だらけだと思うけど。」

笑い疲れて、ソファに倒れていたトールがガバつて起きてヘファイストス様が進める物件の用紙を見た。

「いいなここ!!? よし燕ここにしよう!!?」

「おい、いいのか？まだ一個目だけど他の物件の話を聞くなくて」

「いいんだ！私の軍神としての勘が言つてる。ここにしろ!!? つと」

いや軍神の勘と物件選びは、全くの別ものだろ。

「まあ、そつちがこれでいいなら私としても早く話が纏まるから別に構わないわ。それで何か、他に用事はあるのかしら？」

「そうだヘファイストス、今へスティアつている？」

「ええ、今は自分の部屋にいるんじゃ無いかしら。それがどうしたのよ？」

「いや、大したことじや無いぜ。ただ眷属が出来たので自慢してくるだけで。」

おい、やめてやれよ。つーか俺が恥ずかしいから止めろつて、もう行つちやつたし……。

「トール行つちやつたわね……。貴方はもう用事は無いのかしら？」

あとは特に無いよな？ああ、忘れてた。

「ヘファイストス様、ノラ・ゾーナという鍛治師について教えてもらえます？」

俺がそう言うと、ヘファイストス様は驚いた顔をした。

「ノラについて知りたいなんて、珍しいわねどうしてか聞いてもいいかしら。」

急に、どうしたのノラ・ゾーナは変人だと聞いているしその関係か?

「一昨日、槍を買いましたその製作者名がノラ・ゾーナと書いてあつたので、槍のセオリーをガン無視してあの槍を作った奴がどんな人かと思いまして。」

ヘファイストス様は、信じられない物を見た様な顔をしている。なんだよ何か問題でもあつたのかよ。

「え、ちょっとまつて！あの槍を買ったのホントに？」

「はい。」

「色物武器コレクターとかじやなくて？」

「いいえ、実戦用に。」

「本当は、ステータスの詮索はご法度なのだけど、聞いてもいいかしら？」

「何ですか？」

この世界つてステータスの詮索つて、ご法度なのかしらなかつた。

「あの槍つて60キロはあるのだけど、貴方つて新人よね？」

「ええ、一昨日恩恵を貰つたばかりですね。」

「嘘ではないみたいね……。」

こんなこと、嘘ついてどうするんだ？とゆうか随分あの槍について知つてているな、主神だからか？そう考えているとトールが帰つてきた。

「ただいま！見た感じ、話はまとまつたみたいだな！それなら、ヘファイストスこのまま私たちの家に行くから、鍵をくれ。あと掃除用具もくれ！」

「わかつたわ、これが鍵ね。それとノラに貴方のこと話していいかしら？」

「ありがとうヘファイストス！ノラつて確か、一昨日燕が買つてきた槍を作つた変人だよな。……いいぞ！」

「おい、トール！今明らかにヘファイストス様は俺に聞いたよな。何でお前が答えてるんだよ！まあ、別に構わないけどよ。」

そんなやり取りをしつつ、俺とトールはヘファイストス・ファミリアを後にした。

残された、ヘファイストスは考えていた。何故、新人の彼があの槍を持てたのかを。なぜならあの槍は『力』のアビリティが最低でもBは無ければ使用できない制限があるからだ。

なのに新人の筈の彼は、あの槍を実戦で使うと言ったのだ。かなり変わっている少なくともノラくらいには変人なのだろう。

なぜ、ヘファイストスが新人の鍛治師の作った槍を詳しく知つているかと言うと、あの槍は制限が付いている代わりにアビリティ『力』の成長を上昇させると言う物なのだ。

『制限』これが、【ノラ・ゾーナ】が使えない物ばかり作ると言われる由縁である。用は【ノラ・ゾーナ】の武器は使用者を選ぶのだ。しかし、新人の鍛治師の武器を使うのは新人の冒険者だけである。そのため、ノラの武器を使う事ができない新人冒険者と同業者が広めたのが【使えない武器を作る能面ちび】と言う蔑称である。

「燕・サカミチか、この事を話したらノラはどんな反応するのかしら……。」

☆☆☆

「うへえ、ここが新しいとゆうか中古の家か？管理してないとは聞いてたが、ここまで埃まみれかよ。天井に穴とかは無いみたいだから多少補強すれば問題なさそうだな。」

「すごいぞ、燕！水場が苔むしてる！」

「ヤベーな、こりや今日1日では絶対終わらないぞ。」

部屋の掃除はトールに任せて、俺は補強でもするかと思い工具を持つて天井の補強に行くと、屋根に燕の巣ができていた。いくら俺の名前が燕だからってマジかよ。

そういや、燕の巣つて衛生的は良く無いし、その上ダニの発生原因

になるんだよな。どうすっかな…。

そして、俺は燕の巣を刺激刺さないように屋根の整備をしたが案の定今日一日では、サッパリ終わらなかつたのでまだホテル暮らしさ継続になりそうだ。

「トール、掃除の方は終わりそうか？」

「この状況を見てそれを言つてるならお前の頭はどうかしてるぜ。」

「そりやそうだ。それとな屋根に燕の巣ができるてなどうしたものかと。」

「燕の巣だつて、私たちの家にはびつたりじゃないか！ とりあえず雛が巣立つまでは見守つてあげようぜ。」

「とりあえずは放置の様だ。まあ、どつちでもいいがな。」

「あいよ、それじやそうするか。よし今日はここで切り上げて呑みに行こうぜ。」

「賛成!!？」つで今日はどこ行くよ？」

「そうだな、火蜂亭でも行つてみるか。」

俺とトールは火蜂亭に酒を呑みに行く。

☆☆☆

今、俺は星熊盃に酒注ぎ呑んでいる。

火蜂亭の床には、冒険者が5人転がつてゐる。呑み過ぎたのかな？

酒が弱いならあんま呑んじやいけないよ。H A H A H A

嘘です……俺がやりました……どうすっかなくこの状況、とりあえず何故か懐が潤つたから、弁償は問題なくできるけど周りからの目線が痛いぜ。

唐突だが、ここで何があつたか話そう、といつても大したことは無いのだが簡単に説明すると火蜂亭に着いた俺とトールは酒と飯を食つてたんだけど俺たちの見た目のせいか、この転がつてゐる奴らに絡まれたのである。

最初は俺も無視していたんだが、頭から酒を掛けられたのである。ただ、普段の俺なら笑つて許しただろう。

しかし、今の俺は酒を呑んでいる。つまり、そういうことだ【大酒呑み】の酒乱が発動したもつと言えばぶつんした。そのまま、俺と冒險者5人組との喧嘩が始まつたのである。

ぱつと見た感じだと、ガキを5人がかりで痛ぶつている様に見えるだろう。

だか実際は違う。LV・1と言えども『力』のアビリティがカансストしている上、スキルで身体能力が向上されているのだ。

結果から言つてしまふと、一人に付き一発殴つた。

一人目は、胸を殴られ肋骨が砕け。

二人目は、顔を殴られ顎が外れ。

三人目は、腹を殴られ吹っ飛び。

四人目は、股間を蹴られ絶叫し。

五人目は、腕を掴んで床に叩き付けられた。

さて、この状況をどうしたものかとトールを見ると地面で伸びてるやつを見ながら笑っていた。流石は、軍神である喧嘩一つで特に何も思わないんだろう笑いながら酒を呑んでやがる。

俺も面倒くさくなつてきて、トールのいる自分の席に戻つて新しい酒を開けた。転がつてゐる奴と俺を見てどうしたものかと放心している他の客をほつといて。

そんな中静寂を破るかの様に、二人の女冒險者が入つてきた。一人はヒューマンもう一人はエルフかコイツら強いな。

近くのおつさんが「アストレア・ファミリアだ。」って言つとるけどコイツら有名なのか?

「すごい状況ね。一体何があつたの?」

店に入つてきて、いきなり事情聴取を始めた。酒場に来たんだから酒を頼めよ…マナーがなつてないな。喧嘩した俺が言う事じや無いけどな。

あ、おつさんが俺を指差して。エルフが「あの子供が?」と驚いている様だ。

褒めるなよ照れるだろ。ありやこつち來たな、どうしたものか。「貴方がをやつたと聞きました。は本当ですか?」

うわあ、話しかけてきたよ。めんどくさいなあ、トールは何も言わないし俺のやり方でやるか。

俺は無言でエールの栓を抜き、新しいコップにそれを注いでいく。「おい、聞いているのか！私はこれを貴様がやつたのかと聞いていいる。」

エルフに少し怒氣が混じっているが俺は無視してエルフの前に注いだエールを出す。

「なんのつもりだ。」

俺の行動にエルフは少し戸惑っている。だから、俺はエルフに黄色の旗の店主が殺人メイドに言つた言葉を使おう。

「酒場に来たんだから酒を頼め、バカタレが。」

俺の言葉にトールは笑い周りの客は青ざめた。それが気に食わなかつたのか明らかにエルフが切れた。

「貴様！ふざけてい 「ふははは!!?」 ! 何故笑つているのですか！アリーゼ！」

「フフフ、いやだつてさ、その少年の言う通りなんだもん。」

そう言つて、俺が出した酒を一気に呑み干した。

「ふはー!!?うまい!!?ありがとう少年。」

こつちのアリーゼというヒューマンは、エルフより話がわかるみたいた。

「私は、【アストレア・ファミリア】の団長アリーゼ、少年名前を聞いていいかな？それと何があつたか聞いていい？」

エルフは明らかにイライラしながら俺を睨んでる。こうゆう奴は、無視無視。

「俺は燕・サカミチでこつちがうちの主神トールだよ。」

「やあ！はじめましてだな。アストレアの子供たち私は紹介に預かつた通り、【トール・ファミリア】の主神トールだ。まあ、ファミリアと言つても四日前にできたばかりだけどな。」

俺は星熊盃の酒を飲みながらトールの話を聞いていた。エルフよ、いつまで睨んでやがる。

「話を聞きたいから、相席しても構わないかな？」

「ああ、酒の付き合いならいくらでも構わないぞ。ほれもう一杯呑め。」

「ありがとう燕。ほら、リューも座りなよ。」

「いえ、私は遠慮します。」

「フン」と鼻をならす、どうやらエルフは完全にヘソを曲げたらしい。まあ、俺が悪いんだけどな！だつてしようがないじゃん、面倒になつちやたんだから何が一番悪いかと言うとタイミングかな。

「ありや、ごめんねうちのツンデレ頑固ちゃんが

「いや、こつちも悪かつたな少し気が立つててな。それで、何があつたかだな。それは——」

俺はアリーゼ達が酒場にやつて来るまでに、起きた事を話した。

「つて感じだけど、何か質問は？」

「私からは無いかな。他の人が言つてた事と特に違いないし、経緯を聞いた感じ悪いのはこの【ソーマ・ファミリア】の人たちっぽいしね。リューからはある？」

「それでは、神トール私から2つ聞いてよろしいですか？」

「私にか？別に構わないぜ話してみな。」

「ではまず一つ目は、貴方達は本当に四日前に出来たファミリアなのですか？」

「ん？その言葉の真意は分からぬけど、間違いなく四日前でてきたファミリアだぜ。」

「分かりました。では、燕・サカミチ彼はLV.1であつていますか？」

?

「それこそ、本人に聞けよ……まあ、いいけどな。そうだぜ、燕はLV.1だぜ。」

「そうですか、ありがとうございます。神トールこれはお勘定です。では、」

そう言つて、エルフは金を出して出て行つた。いやお前何も食つても、呑んでも無いだろ流石に受け取れないな。

「アリーゼ、アイツは何も食つても呑んでも無いそんな奴の金は受け取れない。この金はさつきのエルフに返してくれ。」

「え、ああうん。分かつたわ、お酒美味しかったわごちそうさま。」

そう言つて、アリーゼはエルフを追つて店を後にした。

「さて、私たちも引き上げようぜ、ちょっと疲れだぜ。」

「そうだな、帰るか。そういえば結局アイツらこの伸びてる奴ら、放置していいったな……」

「確かに……。」

俺たちも金を払つて、火蜂亭を後にした。

リュー・リオンは酒場の少年【燕・サカミチ】について考えていた。

正直、かなりムカつくタイプではあつたが、それはともかくとして今回彼が行つた事だ。五人対一人の不利な状況で新人冒険者でありますながら、一発で相手を沈めている事も十分ではあるが、それより問題なのが喧嘩した相手なのだ【ソーマ・ファミリア】これはさして珍しく無い。ただし相手にL·V·2が混じっていたのだ。

本来、レベルが一つ違えば勝利は絶望的だ。それを四日前に冒険者になつた少年が覆したのだ。

彼は、本当にL·V·1なのか？

「リューいつまで、ヘソを曲げてるの？」

「アリーゼ、私はヘソを曲げてなんていません。」

「本当に？ 随分と燕を睨んでたけど？」

「あれは、彼の言動のせいです。それよりアリーゼはあの少年の事どう思いますか？」

「何！ リュー恋でもしたの！ シヨタコンになつたの！」

「そういう意味では無い！ アリーゼ！ 貴女わかつてて言つてますね！」

アリーゼは「え」とリューをからかつてから、少し真面目な顔をしていった。

「そうだね。わからないというのが本当のどこかな。」

「わからぬですか？」

「うん、わからない。わからないから何も言えない。」

「そうですか……」

「後これ」

お勘定として払ったお金をアリーゼがリューに渡した。

「これは、私が払ったお金ですね。何故アリーゼがこれを？」

「いやね、「何も食つても呑んでも無い奴の金はいらない」ってさ」

「そうですか。」

酒呑みの少年にまたリューはイラつとした。

☆☆☆

俺は宿に戻つて呑み直す。

いやー、いろいろあつたぜ。今日はあのままトールは下宿先に帰つていつたし、数日ぶりの一人で呑む月見酒これもまた風情があつていiez。

俺は【ソーマ・ファミリア】の酒を星熊盃に注いでさつきのことを思い出した。

そういうや今日喧嘩になつた奴を【ソーマ・ファミリア】つてアリーゼが言つてたな。しくじつたなこのうまい酒を作るファミリアとは仲良くしどきたかったんだけどな。

まあ、やつちまつた物は仕方ないし、諦めるかまたノームの爺さんが入荷したら買いに行くとするかな。

そして今日あつた【アストレア・ファミリア】あの後少し聞いて回つたらどうやら【ガネーシャ・ファミリア】とともにオラリオの治安維持を率先してやつてる変わり者の集団でなんと11人の団員全員がLV.<sup>第二級冒險者</sup>4であるという。

何かと俺は変わり者と縁があるらしい。

【アストレア・ファミリア】は、このオラリオでは『Bランク』ファミリアに当たるらしい。そして、言うまでもなく俺たち【トール・ファミリア】は最低ランクの零細ファミリアである。

全く、先の道のりは長く果てしないようだ。

さて明日は、初のダンジョンだし今日は早めに寝るか……いや

もう少し呑もう！

## 04ダンジョン潜つて何が悪い!?

やあ！今5階層で、コボルトとゴブリンなどを蹂躪している俺だ!!  
？コイツら弱い引くほど弱い。

どのくらい弱いかと言うと槍でぶん殴るとすぐに死んで塵になる。  
ダンジョン潜つて体感5時間くらいになるが今のところ、ちっこい  
魔石が30個くらいになるのだがこれ一個いくらなんだ。

1時間で、魔石6個くらい実に効率が悪いもつと潜つてみようかと  
思うのだがトールに一ヶ月はダメと言われているので我慢しよう。  
何より問題なのはそのモンスターとの遭遇率の悪さだ。それに他の  
冒険者とのブッキングで探し直しそんな事を繰り返していると全  
然溜まらないのである。

因みに獲物の横取りはご法度で、ギルドの規制対象ですらある。

もう一つ、他の冒険者が多い。

そりやそうだろう、ほとんどの冒険者はLv.1でその一生を終わ  
らせるらしい。それ以外の一握りがLv.2になるようだ。そして、  
Lv.1は12階層までの上層しか潜る事ができない。

つまり上層はモンスターを奪い合う激戦区であり、索敵の方法が無  
い俺はこの競争に負けている訳である。ちくせう

その上、上層のモンスターは弱い為それだけ経験値も魔石も稼げな  
い。負のループである。

7階層まで潜れればキラーアントがいるのだが、キラーアントは調べ  
た感じだと殻の硬い蟻なのだが、特筆する点は死にかけのキラーア  
ントは仲間を呼ぶ習性があるようだ。

つまりキラーアントを見つけたら半殺しにして仲間を集めさせそ  
れを一匹だけ残して全滅させる。

これを繰り返せば、上層で起きるはずのない簡単な怪物の宴がで  
きる為非常に効率的だ。問題は1時間でどれだけ呼べるのかが分か  
らない事だが、それでも今のやり方よりは効率が良さそうだ。  
今日、帰つたらトールに許可をくれるように頼んでみよう。

そんな事を考えていると、冒険者が俺の前を全力で走つて行つた。

何事だ？

そう思うと、冒険者が走つて来た方向から20匹くらいのコボルトとゴブリンがいらつしやつた。

ここで問題です！今このような状況をなんて言うでしよう。チツチツチ・・・

おそらく貴方は怪物進呈<sup>バス・パレード</sup>と思つたろう。

だが、俺は違う。これを俺は『鴨がネギ背負つてやつてきた！』と言つう。

さあ、蹂躪を始めよう！

蹂躪もといモンスターの一掃は15分くらい掛かつた、倒すのに時間がかかつたと言うより、逃げた奴を追いかけるのに時間が掛かつた。

そろそろいい時間だろうか？詳しい時間を知りたい。

この世界、時計自体はあるのだが懐中時計のようなかさばらないタイプの時計はめっちゃ高い、それこそ一部の富裕層が持つ物のようだ。

今回の稼ぎなのだが、集めた魔石が大体50個くらいなので一個100ヴァリスだとしたら、今日の稼ぎが5000ヴァリスって所か？ そう考へるとシビアだな。

まあ日本円に換算すると1日5万円だな。かなりやばいバイトしたら貰える額だな。でも一応これつて命懸けの怪物退治だよな、だとしたら相場なのか？

「ぶおおおおおーー!!?」

この闘牛みたいな鳴き声、聞こえたこの鳴き声を出すモンスターは俺の知つてゐる限り一種類しかいない。そしてここは5階層そのモンスターは居てはいけないなんせそのモンスターは中層に存在する『ミノタウロス』である。

つまり、LV. 1ではまず勝てない。

そして俺は今日がダンジョン初探索である。その上、目立たないようにする為にトールから5階層より下に潜らないように言われている。

ここでミノタウロスと戦う事はそのまま目立つ事に直結する。故にここは逃げる事にしよう。

いろいろ御託を述べたが要するに怖え。

俺がさっさと逃げようとしていると「まで」と声が掛かった。  
なんだよこの野郎、すぐ近くにミノタウロスが居るんだから逃げさせろよ。

「あの方が、貴様の力を見る事を望んでいる。」

誰だよ、あの方って名前を呼んではいけないあの人か？そう思つて  
いると俺の後ろにでかい男がいた。獣人みたいだがなんの獣人な  
かは分からん。クマか？

「何のようだ？クマの獣人。」

「同じことを言わせるな。あの方が、貴様の力を見る事を望んでい  
る。」

「つまり、クマの獣人。ダンジョン探索初日の俺にミノタウロスと戦  
えと言うのか？」

「そうだ。」

はつきり言いやがったよ、この野郎。

「それと一つ訂正しき俺はボアズだ。」

クマじやなく猪なのね。さてどうした物か、どの道ミノタウロスと  
戦わなければ、この猪の獣人に殺されるよな…。選択肢無いじゃん。  
ちくせう

そんな事を考へてゐる間に、ミノタウロスが来た。それと同時に猪  
の獣人が居なくなつた。いやどこかで見てるんだと思うけど…。

ミノタウロスはどこで拾つて来たのか大剣を持つてゐる。  
「うおおおおおおお！」

ミノタウロスが吠えながらこつちに突つ込んで來た。マジかよ

俺は横に飛んでミノタウロスの突進を避けた、ミノタウロスの突つ  
込んだ壁は、少し凹んでいた。どんな威力だよ

ミノタウロスは俺に向き直すと大剣を振り下ろすのを俺は槍で防  
いだ。

あつぶねー！槍を交換してよかつたよ。今までの槍ならここで死

んでたぞ。

落ち着け俺！とりあえず現状考察だミノタウロスの肉は立ちにくく、だから投げナイフでは意味がないしからといって蒸氣暴威ジヨウキボーアイを使おうとは思わない。となると消去法で槍で貫くしか無いと…。クソツタレ

多分だけどあの大剣は大して強度は無いと思う。それに対して俺の槍はそれなりに強度があると思う。  
なら、行動は決まつたな。

「ぶおおおおーー!!?」

振り下ろされる大剣を俺は横から槍をぶん殴り粉碎し、そのままミノタウロスの胸を槍で貫いた。

「ぶおつ！」

ミノタウロスはそのまま散りとなつて魔石だけ残して消え、俺はその魔石を拾つた。

その戦い方は、偶然にも俺が検問で男を殴り飛ばした時と同じだつた。

「これで、満足か？」

何処かで見ているだろう、猪の獣人に行つたのだが返事は返つて来なかつた。俺もう帰つていいかな？

それにしても俺の力が見たいね、やっぱり昨日の喧嘩で少し目立つちまつたのか？いやそれでも、さつきの野郎は俺とは格が違うレベルでハイパー強いだろ…。

そんな奴のご主人様ね。の方つてやつがどんな奴かは分からないが、碌でも無い事をする奴なのは今回の一件で良くわかつたぜ。もう関わりたくねー

それにも今日は厄日なのか？【怪物進呈】バスパレードに【ミノタウロス】それをダンジョン初日で遭遇つてどんな確率だよ。

ギルドになんて説明するかな、怪物進呈バスパレードの方は数が少なかつたで済むが問題はミノタウロスの方だな。ここにこの魔石を置いて行つたらバレないだろけど勿体ねーよな。

そうだ!?聞かれたらさつきの猪の獣人が倒した事にしよう。そ

うすりや問題ないだろ。たぶん!!?

そう思いながら、俺はダンジョンを登つて行くのだった。

バベルの上で一人の少年を鏡で観ていてる女神がいた。この女神こそ猪の獣人の主神であり「あの方」と呼ばれた美の女神だ。

「ミノタウロスでは、当て馬にもならなかつたわね。あのトールが選び、トールを選んだ少年ね。また遊びましょ燕。」

☆☆☆

ギルドで、おばちゃんに怪物進呈(パス・パレード)を受けた事を話したら、相手の見た目は覚えているかと聞かれたら覚えていてる限り話した。

そしたら、何いきなり5階層まで潜つてているのかと説教を受けてしまつた。しまつたそつちを考えていなかつた。サーセン

説教が終わつたら、魔石の換金をしたのだがこれがびつくり合計2万40000ヴァリスになつた。内訳を聞いてみたら、小さい魔石が一個400ヴァリスで大きい魔石が4000ヴァリスだそうだ。結構ウハウハである。

そこで冒険者の集団に見られている事に気がついた。そいつらのエンブレムは三日月にF a t eの聖杯のようなマークだつた。

そこでふと思いついた、あれは昨日俺がぶつ飛ばした連中のファミリアだつたぜ。

てゆうかよくよく見たら俺に怪物進呈(パス・パレード)した奴いるじゃん!

【ソーマ・ファミリア】基本的には、酒を作つてているイメージしかないが。ダンジョン探索系ファミリアに分類されるようだ。

昨日の奴らといい、今俺を見てる奴らといいあまり行儀がいいファミリアではないみたいだ。

何かしてくるかと思つたが、流石にギルドで事を構える気は無いようで特には何もしてこない。俺としても何もしてこないのであれば別にいいかと思いギルドを後にした。今日はどこに呑みに行くかなー

☆☆☆

案の定、連中着いて来ちゃつたよ。とりあえず裏路地に入つたけどどうすつかな。

「おいテメエ！」

うわつ声かけて來たよ、やだなーめんどくさいなー無視しよ。  
しかし回り込まれた。

「無視してんじやねえぞ！ガキ！」

とりあえず、目視で確認できる人数は4人か。

「なんかようか？」

なんかニヤニヤしてるよ、何考てるかは大体想像がつくけどな。  
後クセーぞ。

「昨日、テメエに俺のファミリアの仲間が怪我を負わされたよな。本当ならファミリア間の問題にしてもいいんだがテメエも面倒ことはごめんだよな。だから、今回の件慰謝料だけで許してやるぜ。そうだな、今回のダンジョン探索の儲けを全部置いてけ。」

やつぱり昨日の喧嘩のせいか。

金で解決してもいいんだけど、コイツら絶対調子乗るだろ。

ここでボコしてもいいんだけど、今日はミノタウロスを相手して疲れただんな。どうすつかなー。

「おい、聞いてんのか！いいから有り金全部置いていけと言つてんだよ！」

まあ、金で済むならそれでいいかと思い金を出そうとすると、

「どつどと、金を出しやがれ！出す氣がねえなら仕方ねえな、地面で転がつててるテメエから貰うとしよう。」

なんだよ、結局こうなるのかよ。穩便に解決しようとえた俺が馬鹿みたいにじやねえかよ。

俺とカツアゲ連中との喧嘩は始まつた… そして、すぐ終わつた。

結果から言えば昨日と同じである。

一人付き一発殴つて黙らせ地面で伸びている。ただ一人だけ意識を残して…。

あえて一人だけ意識残して、交渉か尋問で俺を狙う理由と【ソーマ・ファミリア】の内情を知ろうと言う算段だ。うん！ 実に平和的！

その為に、伸びてる奴らからドロップアイテムを集める。ざつと1万ヴァリスか3人で1万つて、しけてんなー。

「おい！」

意識がある奴に平和的な交渉を持ちかけるとしよう！

「ひつ!!？ お願ひだ許してくれ!!？ 僕はカヌウのやつにいい儲け話があるって言われただけなんだ。もう、あなたと関わらないから許してくれ!!？」

何があつたかは知らないが、ここは平和的な交渉と行こうか。

「今、ここに大体1万ヴァリスある。これが欲しかつたら何故俺を狙つたかと【ソーマ・ファミリア】の内情を言え。」

「許してれるのか！ 分かつた、何でも話すだから……」

だからと言うのは、金の事だろう。

「なら、まず俺を狙つた理由を言え。」

「詳しくは、知らないがカヌウの話では上からの命令だそうだ、おそらくは団長のザニスの野郎だ。」

「なんで、お前らの団長が俺を狙う。俺の聞いた話だと【ソーマ・ファミリア】は下つ端のいざこざをどうこうする奴らじやないだろ。」

「それは、俺もよくわからない。ホントだ信じてくれ！」

「いいだろう。次に【ソーマ・ファミリア】内情を話せ。」

「俺たちの団長はさつき言つたとうりザニスの野郎だ。構成人数は50人くらいだ。」

「それで。」

「俺たちはソーマ様の作る。酒を呑む為に金を集めてる。」

ソーマ様の酒？ それって【ソーマ・ファミリア】の酒か、確かに美

味いがここまでするほどか？

「俺たちが売つてる酒は失敗作だ。」

「はい？ あれが失敗作だと？」

「俺たちは、ソーマ様の完成品の酒、<sup>ソーマ</sup>神酒を呑みたくて金を集めんんだ。」

「神酒ソーマつてのは、そんなに美味しいのか？」

「ああ！あれ一口呑めば、天に飛ぶ思いができる。この世の快樂そのものだと言つていいほどだ。俺たちは、いや俺は！あがまた呑みたい！だから、集めるんだ金を！」

神酒ソーマを説明する男の様子が変わった。酒は呑んでも呑まれるなつて言うだろうに。

「OK、コイツは報酬だ。」

金の入つた袋を受け取り男は走つて行つた。俺もその場を離れようとしたら。

「ここで、何をしているのですか。」

昨日のエルフがそこにいた。

確か名前は……ああ、だめだ覚えてない。今日はもう疲れたんだよ、もうイベントはいらねえぞ。

「彼らは、何故倒れているのですか。」

「昨日と同じだ。絡まれたから殴つた。」

正直、このエルフは苦手だ、基本関わりたくない。

「[ソーマ・ファミリア]ですか……なるほど、昨日の……」

「それじゃ、俺はこれで。」

「待ちなさい。」

「なんかようか？、俺これから、呑みに行くから忙しいんだけど。」

「街中での争い事は慎みなさい。街の人達に迷惑がかかる。」

こつちだつて、好きでやつてるわけじゃないぞ。まあ、エルフが言つてる事が正論すぎて言い返せないけど。

「それは悪かつたな気をつける。それじゃ」

「そう言つて、俺はクールさるぜ。」

彼が去つてから少し考える。

彼が、一体何を考えているのかがわからない。さつきの言葉に嘘は無かつた、だからといって反省をしていくようには見えなかつた。

正義の剣を掲げた彼女は悪の存在を許さない。

そんな彼女には、彼が正義にはまるで見えない周りのことを考えず喧嘩をする者が正義のはずがない。しかし、一概にも悪だとも思わな

い。

少なくとも、今は自分から争いをしたとは聞いていない。  
もし、貴方がイヴァイ尔斯閻派閥に堕ちるならそのときは……。」

そう言いかけてリューはその場を去った。

☆☆☆

バイト終わりのトールと合流して『豊穣の女主人』に来た。  
「シングング、ブハー！ それで、どうだつたんだ、初めてのダンジョンは  
？」

「いきなりだな、今はこの酒を飲ませろよ。

「ちょっと待て、シングングング、ふう。今日のダンジョンか、いろいろ  
ありすぎて何から話せばいいか。」

「そんなにいろいろあつたのかよ。」

「まず、5階層でモンスター狩りするのは効率が非常に悪いことがわ  
かつた。明日からは7階層まで潜つていいか？」

「おいおい一ヶ月は5階層までつて約束だろ、それになんて7階層？」

「7階層には、キラーアントがいるから。」

「キラーアントって確か新人殺しの異名があるあのキラーアントか  
？」

「ああ、キラーアントが一匹でもいれば後は、向こうから集まつてくる  
からな。探して回るより効率がいい。」

「そう言うことか、だけどな。」

「ダメか？」

トールが「ん」と腕を組んで悩んでいる。

「そうだな、5階層でもしつかり稼げたんだろ。」

「そうだな、イレギュラーはあつたが2万4000ヴァ里斯くらいは  
儲けた。」

「に、2万40000ー！ 私のバイト代なんか、日給1500ヴァ里斯な  
のに！」

「大体トールのバイト代の16倍だな。」

「くそー！くそー！やけ呑みだー！今日は燕の奢りだからなー！」  
もともとそのつもりだから別にいいけどよ。

「結局、5階層までなのか？」

「ああ、一ヶ月はこのまま5階層を探索してくれ。」

「了解、あとダンジョンでミノタウロスにあった。」

「ブフウー!!？けほつけほつ!!？…ミノ…タスロ…スつて、け

ほつ、よく生きて帰つて來たな…。」

トールは盛大に吹き出して、少し周りから注目を集めている。

「いやさ、俺も最初は逃げる気だつたんだけど、熊みたいな猪の獣人にミノタウロスと戦えつて言われてさ。仕方なく」

新しい酒を注文して、つまみを食べる。うまい

「ん？ちょっと待て、ん？その言い方だとミノタウロスと戦つたつて聞こえるけど？」

「いや言つただろ、イレギュラーがあつたつて。」

「しかも倒したのかよ！私が恩恵（フルナ）与えた子供ながら流石に信じられないぞ。でも、嘘をついて無いのはわかるし…。マジかよ。」

トールは少し頭を抱えている。

「おう、ノンフィクションだ。」

「ノンフィ？なんだ？」

「気にするな、大した意味じゃない。」

俺は新しく届いた酒を半分くらい呑んで、次の話をする。

「後、何故かは知らないが【ソーマ・ファミリア】の団長のザニスって奴が俺に目をつけてる。」

「【ソーマ・ファミリア】？昨日の喧嘩のことか？」

確かに、心当たりが昨日の一件しかないんだよな。

「そうだと思いますんだけど、下つ端の喧嘩程度で団長なんかやつてる奴が俺に目をつけるかね。俺を襲つた奴の感じだと仲間意識なんて無いにも等しかつたしな。」

「仲間意識のないファミリアかソーマは何してんだか。燕、【ソーマ・ファミリア】は仮にも大手だ。警戒はした方がいいな。」

「賛成だが、結局俺の行動は変わんねーぞ。」

それからトールとくだらない話をして、いい時間になつたのでトールと宿に戻る事にした。

宿に戻りステレオの更新をしたのだが  
ここでまたおかしい事が起きた。

卷之三

アヒルテ

魔力	敏捷	器用	耐久	力
：	：	：	：	：
H	B	G	S	S
1	7	250	915	999
5	2			999
0	3			999
∨	∨	∨	∨	∨
H	A	G	S	S
：	：	：	：	：
1	8	296	986	1000
6	0			1000
3	6			1000

# 魔法

- ・人差し指と中指を二本立て念じる事で使用することができる。
  - ・発動時、術者を中心に水蒸気爆発が起き、術者の半分の大きさの分身を作る。この分身が動く又は、熱せられることで体積が膨張していき再び分身を中心に水蒸気爆発が起ころ。
  - ・爆発する回数、大きさ、威力は込める魔力によつて変わる。
  - ・【**蒸気暴威**

10

ス  
キ  
ル

- ・大酒呑みになる。
  - ・どんな酒をどれだけ呑んでも、テンションが上がるだけで泥酔することも中毒になる事も無い。

・酒乱になる。

・体が強くなる。

・耐性がつく。

### 【星熊童子】

・星熊盃で酒を呑むと経験値獲得。

・酒乱時、獲得経験値上昇。

・酒乱時、身体能力上昇。

・酒が嫌いになるとこのスキルは消滅する。

「燕！ステータスが上がりまくっているんだけど！」  
なんと、トール280オーバーなのである。伸びすぎである。

トールからステータスの書いてある紙をもらい、ステータスが異常に上がっている事を確認する。と言つても俺は俺のステータスしか知らないので一般的平均を知らないのだが。

「ミノタウロスを討伐したのがデカイのかもな。」  
「ミノタウロスもあるだろうけど燕の場合【星熊童子】の経験値上昇が大きいだろうな。『力』とか、カンスト突き破つてるし……」

そう言うトールは少し呆れ顔をしていた。失敬な！

「そういうや、ミノタウロス倒してたのにランクアップしないな。燕はL v. 1でミノタウロスを討伐したんだ。それならランクアップしそうなもんだけど。」

トールは腕を組んで変なのって考えている、俺が思うにミノタウロス討伐では俺の偉業にはならなかつたと言う事だろう。手厳しいか？

「そりゃ、俺全く魔法使つて無いんだけどなんで魔力伸びてんだ？」

ステータスの魔力の欄を指差して、トールに聞いた。

「それは、【星熊童子】の星熊盃で酒を呑んで貰える経験値の一部が魔力に変換されてるんだと思うぜ。てゆうか、何で魔法使わないんだ？」

「5階層くらいだと基本的に通路が狭いからな、幾ら俺にはダメージ

が入らないからといつても爆発起こして生き埋めにはなりたく無い。」

「なるほどな、確かに地下だとこの魔法は制限がかかるな……。」

「そういえば、「ソーマ・ファミリア」の酒があるんだ。昨日ちーっと呑んじまつたけどまだあるから呑もうぜ！」

「マジか！ソーマの酒！燕、星熊盃貸してくれ！」

「またかよ、まあいいけどよ。ほれっ」

星熊盃をトールに渡し、俺は普通のグラスでソーマの酒を呑む。うめー！

でも、これが失敗作なんだよな……。完成品の神酒<sup>ソーマ</sup>か呑んでみてーな。

おい、トール…… そんなガブガブ呑まないでくれよ……。

## 05 鍛治師雇つて何が悪い!?

やあ！最近ダンジョンで稼ぎを出しつつ、家の掃除をする俺だ！あれからなんだかんだ、一ヶ月経ち俺も5階層より下に潜れるようになったのである。ん、いきなりすぎるつて？そんなに俺が雑魚を蹂躪してるだけの話が聞きたいか？

何かあつたとするならどうでもいい事だけど、たびたび「ソーマ・ファミリア」にダンジョンで襲撃されるくらいだ。

最近は、以前考えていた【☆キラーアントで簡易怪物の宴作戦☆】でダンジョン探索している。この方法は歩き回らない分、体力温存になり非常に効率が良い！

家の方だが、この一ヶ月で何とか人が住める程度にはなったのだが家具がない。置きっぱなしになっていた家具、椅子や机や本棚などの使える物は綺麗にして使い直す事にしたのはいいのだが。

問題はベッドやシーツなのだ。

結論から言おうと虫やネズミの住処になっていた…。元が根っからの日本人なのでこの世界に来てから多少は耐性が付いたといえども、キモい！マジキモい！

この世界に来てから、初めて絶叫したかもしれない…。

ミノタウロスにも、絶叫しなかつた俺を驚かせるとはやるな虫！

ベッドやシーツは新しく買い直しをするとして…。問題は金である。俺が一年かけて貯めた金はもう無い。

ダンジョン探索は二日行つて一日休むと言うローテーションでダンジョン探索しているのだが、冒険者という職業柄準備に金を掛ける。

ポーションや投げナイフなどの消耗品、装備の手入れなどももちろんあるのだが…。

俺たちの場合何より呑み代である！いやマジで！呑み代がいつもバカにならない！

俺もトールもよく酒を呑む！毎晩毎晩酒場で呑むだけじゃ無くて宿で呑む酒なども買うので、少しづつ貯金をしてはいるのだがあまり

貯まらないのである。トールのバイト代なんて『豊穰の女主人』で一回飯を食べれば無くなる。

てゆうか足りない。

「トールよ、家具を買いたくても金がないぞ。」

「燕が酒ばっかり呑んでいるからだろ！」

「いや、お前も人の金で酒飲んでんじゃねーか!!?」

「私をヘスティアみたいなブー太郎と一緒にするな！」

「たびたび出てくるな！ヘスティア様！一体どんな神なんだよ！」

確かに、俺が知つてゐる限りだと竈の神で自分は家庭の竈の火を守ればそれでいいと言う神各者のイメージなのだが？後は、確か処女神だつたな。

「ヘスティアは下界に来てから、ヘファイ「コンコン」！誰だ？」

ヘファイストス様がなんだよ！そこで止めるなよ、すげー気になる！それにしても客か？うちの家ホームに？ここに俺たちの家ホームがあるのを知つてるのは、俺たち以外だとあとはここを売つてくれたヘファイストス様くらいか？

そんな事を考えてると、もう一度扉を叩く音がしたので俺は「はいはーい」まるでサザエさんの如く扉に駆け寄り扉を開けた。

そこには、黒髪ショートに碧眼の幼女いや小人族か？がいた。

俺の身長が150くらいだから110センチくらいか？

「えつと、うちに何か用ですか？」

「はい、初めまして、貴方が【燕・サカミチ】さんですね。私は【ノラ・ゾーナ】と申します。ヘファイストス様から貴方の事をお聞きして、お会いしたいと思ひうかがいました。」

そう淡々と自己紹介をした。

ノラ・ゾーナだつて、それつて俺の槍を作つた奴ぢやないか！まさか、向こうから接触してくるとは…。

「あの…。」

「ああ、すいません。とりあえず、ここではなんだし散らかつてますけどどうぞ。」

俺はノラ・ゾーナを酒場のソファに座つてもらつた。

「燕誰だそいつ？客か？」

「ああ、俺の槍を作った。ノラ・ゾーナさんだ。トール来客用のお茶つてあつたつけ？」

「えつと、そつちの棚に確か緑茶があつたぜ。」

俺はお茶を入れに酒場のキッチンに向かつて、お湯を沸かした。

「それで、お前はノラ・ゾーナだつたな！私はトール・ファミリアの主神のトールだ！よろしく！」

「ご挨拶が遅くなつてすいませんトール様。初めまして、ヘファイストス・ファミリア所属の鍛治師ノラ・ゾーナです。」

「敬語や様ならいらぬぜ。気軽に接してくれ。」

「いえ、この喋り方は癖みたいな物なので気にしないでください。」

「話は、聞いてるぜ。どうやら面白い物ばつか作つてるんだつてな。」

「面白いものですか……」

「ああ、何でも変人だとか。」

そこにお茶を持つて、俺が戻つきた。

「おいトール！俺の客に失礼をするんじやねーよ。」

そう言つて、すんごく弱くこづく。

「いつて、おい燕主神を殴るとは、どうゆう了見だ！」

「だから、手加減しただろ。」

「当たり前だ！燕に本気で殴られたら、私は強制送還になるぞ！」

そんな、光景を見て少し驚いているノラに緑茶を出す。

「緑茶だ。」

「緑茶ですか、このオラリオでは珍しいですね。」

「俺は極東の出身だからな、紅茶やコーヒーも嫌いじや無いが舌に慣れた緑茶が一番だ。」

「やつぱり、極東の出身なのですね。名前を聞いてそんな気がしていたのですが。」

世間話はもう充分だろ、そろそろ本題でも聞くとするか。ある程度察しはつくがな。

「それで、ノラさんが俺に何のようで？」

「呼び捨てで構いませんよ。私は燕さんと呼ばして頂きますが。要件

はお聞きしたい事とお願ひがあつて来ました。

やつぱりかでもお願ひつてなんだ?

「聞きたい」と、とお願ひ? 答えられるかはわからないが聞くだけ聞くぞ。」

「ありがとうございます。まず、お聞きしたい事なんですが单刀直入に聞くとなぜ私の武器を買つてくれたのですか?」

「ノラの槍を買つた理由?」

「はい、私の噂はご存知でしよう。」

「ああ、槍を買うときに店主のおつさんが使えない物を作る変人つて聞いたな。」

「おい、燕お前私に失礼するなどか言つておいて、お前だつて十分失礼じやねーか。」

「うう、構いませんよ。事実ですから……」  
そう言つた、ノラは少しそんぽりしたように見えた。表情は全く変わらないのだが、

「俺がこの槍を買つた理由ね……安かつたものもあるのだが、一番はコイツの重さと強度だな。」

「重さと強度ですか……失礼ですが、貴方は冒険者になつて一ヶ月の新人だと聞いています。ましてや私の槍を買つたのは、恩恵を貰つたから数日しか経つて居なかつたと聞いています。それは本当ですか?」

「ん? ああ、そうだぞ。なんならバベルの店主のおつさんに聞いて貰つてもいいぜ。」

「そうですが、だとすると貴方が私の槍を持てるはずが無いんですよ。」

「ん? どうゆう事だ? 確かにこの槍は重いが持てないほどじゃないだろ?」

「トール様は、この槍を持つた事はありますか?」

「私が? そういうえば無いな、まあ理由もないからな。」

「そう言つて、トールは槍を持ち上げようとして……持ち上がらなかつた。」

「なんだこの槍！全然持ち上がらないぞ！ンググググー！！！」

「そんな事あるか、確かにこの槍は重いが60キロくらいだろそんなになるか？」

「そう言いながら、俺は槍を持ち上げた！」

「やつぱり、持ち上げられるんですね。」

「どうゆう意味だ？」

「他人のステータスを詮索するのはご法度です。だから私から開示させてもらいます。私には【荷重負担】オーバーロード と言うスキルがあります。」

「随分、カッコいいスキル名だな。燕とは大違ひだぜ！」

トールのその一言に俺は「ほつとけ」と言つたが確かにカッコいいな。俺のスキルなんて【大酒呑み】や【星熊童子】のんべえ だしな…。

「それで、そのスキルがなんなんだ？てゆうか言つてもいいのかよ？」  
「構いません、ここからが本題なので私の荷重負担は私の作る武器に《制限》を掛ける事ができます。」

「制限？つまり、その制限のせいでトールは槍を持ち上げられなかつたのか？」

「はい、そうです。ただし、制限がかかるのはその武器を作った時の私のレベル以下の冒険者だけなので、私よりレベルが高ければ何の問題無く使えます。」

「ちなみにその槍にはアビリティ《力》がBなければ扱う事ができないと言う物です。なのに、貴方はそれを初心者の段階で扱つたと聞きます…。それについては詮索をしませんが、私は貴方に興味が出たとだけ言つておきます。」

「そりや、光榮だな。ところでなんで制限をかけるんだ？」

「それは、かけた制限に対しての効果を付与するからです。」

「はい？効果を付与？そんな事を実感した事ないぞ？この槍にどんな効果がかかつてたんだ？」

「燕、ノラは嘘をついて無いぜ。神の前では嘘はつけないからな。」

「いや、元から嘘だとは思つてないけど、この槍には何効果があつたんだ？」

「その槍には《力》がB以上である事を制限に《力》の成長を上昇させ

るという効果が付与されています。用は成長促進です。」

ノラのその言葉に俺とトールは固まつた・・・。

「あの・・・」

数秒の沈黙の後にノラが声をかけて来た。それと同時に俺とトールは意識が覚醒した。

「まさか、燕の『力』だけがぶつ飛んで高いのはこの槍のおかげだつたのか・・・。」

「マジかよ、全部俺のスキルのせいだと思つてた・・・。」

だが、分からんな。なんで制限がかかると言えどもそんなぶつ飛びスキルを持っている。ノラが蔑称なんかつけられるくらいになつてんだ?

「なあ、ノラ。一つ聞いていいか?」

「何ですか、トール様」

「いやな、そんな凄いスキルを持つてゐるのに何で【使えない武器ばかり作る能面ちび】って呼ばれているんだ?そのスキルの事を言わずともステータス向上を売り文句にしたら、飛ぶように売れたらんじや無いのか?」

トールが正しく俺が思つていた、疑問をノラに投げかけた。

「それは、私は自分のスキルだけを目当てで近寄られるのが嫌だつたからです。それに売れる武器が作りたい訳じや無いんです、命を預けてくれる武器を作りたいんです。」

「でもよ、私にはわかぬえけど、鍛治師つて物は売れるもん作つてなんぼだろ?それでも、いや、使えない物を作つてる何てバカにされても理解されなくとも自分を貫き通すのか?」

「はい!たとえいつまでもバカにされてでも、私は!」

「もう、いいぜ。」

「!すいません、急に大きな声を出して。」

トールの静止にノラはやつてしまつたとばかりに肩をすくめた。

「ノラ!お前は間違いなく変人だ!」

「はい・・・」

「だが、面白いな!」

「！それってどうゆう…。」

「ん？言葉のままだぜ、ヘファイストスが羨ましいぜ！お前みたいな面白い奴が眷属なんて。うちには燕しか居ないからな、いつも、いい子は大手に持つていかかる。」

トールがノラを下げるから上げた為、能面みたいだつた彼女の顔が今は人間味を帯びている。

「ノラさ、ヘファイストスの所が嫌になつたらいつでも言えよ！うちへの改宗はいつでも受け付けるぜ！」

「え、あ、はい…。」

「こりや、一旦落ち着いた方がいいな。そう思いお茶を入れ直す。数分後、お茶を入れ直して戻つてくるとトールがノラを勧誘をしていた。

「トール、無理な勧誘はするなよ。ほら、新しいお茶だ。これでも飲んで落ち着けノラもだ。」

「うぐ、確かに無理勧誘は私の主義に反する…。ズズズ、ふう。落ち着いた。」

「ありがとうございます…。お恥ずかしい所をお見せしました。」

トールは少しずつとしていて、ノラは少し頬が赤いコイツ能面なんて呼ばれている割には結構わかりやすいぞ。

「それで、もう一つお願ひってのはなんなんだ？」

「え、ああ、はい、ゴホン、そのですね虫のいい話なんんですけど、私を専属鍛治師にして貰えないでしようか？」

「専属鍛治師？」

「用は、貴方の専属になつて武器や防具を作らして欲しいと言う事です。」

「俺としても徳しかないし、トールも気に入つたみたいだから構わないぜ。トールもいいだろ。」

「おう！いいぞ！」

「よかつた、ありがとうございます。」

「でもよ、いいのか？俺もトールもノラのスキルをしつちまつたんだぜ。」

「それについては、構いませんよ。専属鍛治師になつたらどのみち話すつもりでしたから。」

「そうかい、ノラがそれでいいなら俺も構わないぜ。これからよろしくな！」

「はい、こちらこそよろしくお願ひします。それともう一つお願ひがあるのですが…。」

「なんだ？この際だから俺に出来る事なら何でも構わないぜ。」

「たまいで、いいので貴方のパーティに入れて欲しいのです。」

「パーティ？構わないが、俺は今んとこソロだぞ。」

「燕さん一人でも、大丈夫です。L·v·2の発展アビリティの鍛治を手に入れたいので。」

「そうゆう事が、別に構わないぜ。パーティをダンジョンに潜るときはいつもやつてくれ、ダンジョン探索付き合うぜ。ちなみに今は何階層で探索してるんだ。俺は大体7階層に入り浸つてるんだけど。」「！一ヶ月で7階層…。流石ですね私は1年半でやつと、7階層なのに…。」

「明らかにショックを受けてるな、どうすんだよ燕。」

「いや、どうするつて…。てゆうかコイツ表情はほとんど変わらないのに雰囲気が凄くわかりやすいな。」

「うぐつ、すいません。取り乱しました。」

「あ、そうそういい忘れてた。」

「何ですか？」

「俺たまに、ソーマ・ファミリアの奴に襲撃されるから。」

「え、あ、え、えええええーー!!？」

ノラから今日一番の絶叫が出た。「一旦、何したんですか？」と狼狽えてるので、「酒場で絡まれたからボゴした」と言つたら「契約する人間違えたかも」って頭を抱えていた。まあ、なんだ、ガンバレ！  
さて、話は纏まつたし呑みに行くか？

俺は呑み会をいつも通り提案する。

「賛成だ！よしノラとの親睦を深める為に今から『豊穣の女主人』に乗り出そうぜ！燕の奢りで！」

「またかよ！たまには主神らしく奢るとは言えないのか？」

「燕、お前！私のなけなしのバイト代から払わせるつもりか！」

「それがどうしたつてんだ！」

「なんだと」

「なんだよ」

「うぐぐぐぐー!!?」

そんな今にも喧嘩をしそうな俺たちにノラが声をかけた。

「あのー。」

「なんだ、ノラ。」

「私、16歳までお酒は呑まないと決めているのでお酒は…。」

「16つて、今幾つなんだ…。」

「はい、今年で13歳です。」

この言葉に俺は驚いた。パルーム小人族だから小さいと思つていたが、俺の一個上だと言えども単純に子供だつたのだ。パルーム小人族は見た目では大人か子供がホント分からん！

「俺の一個上だつたんだ…。」

ついつい、そう呟いてしまつた俺は悪くない…。

☆☆☆

あの後、『豊穣の女主人』で呑み会をして解散になつたので、ノラはヘファイストス・ファミリアの家ホームに向かつて帰路を辿つていた。

話が終わつたら、主神から家ホームに来るようと言つてゐた為である。

今日あつた【トール・ファミリア】の燕・サカミチと言うヒューマンの専属鍛冶師になる事ができた事を、ファミリアの事務員に報告して、主神の部屋に向かつて行つた。

部屋の前まで行き、ノックをすると中から「どうぞ」と言う声がしたのでノラは部屋に入る。

そこには、ヘファイストス・ファミリアの主神ヘファイストスがいた。

「ヘファイストス様遅くなりましたが、報告にあがりました。」

「待つてたわ、来るのが遅いから少し心配しちゃつたわ。」

ヘファイストスは一旦仕事を切り上げ、ノラに向いた。

「それで、燕・サカミチはどうだったの？」

「はい。主神のトール様同様歓迎してくれて、私を専属鍛治師にしてくれました。」

「そう、それは良かつたわね。ノラあなたのスキルについても話したの？」

「はい、驚いてはいましたが、しつこく聞いてくる事はありませんでした。」

「わかつたわ、その他に何かあつた？」

「その……。いや何でも無いです。」

「何よ、そこまで言つたのなら全部いいなさい。」

「……はい。その、トール様から……。」

「トールから? どうしたの、端切れが悪いけど?」

「トール様から、その、勧誘を受けました……。」

それを聞いた、ヘファイストスは少し驚いた顔をした。

「え、勧誘つて……まさか、改宗する気なの!?」

「いえ、今はそんな気ありません。」

「そう、良かつたわ。今日は疲れたでしょ、今日はもう休みなさい。」

「わかりました。お休みなさい、ヘファイストス様」

「ええ、お休みなさい、ノラ。」

そう言つて、ノラは一礼をしてヘファイストスの部屋を後にした。

「そう、ノラ、”今は”そんな気がないのね。」

☆☆☆

ノラと別れてから俺とトールは家に帰つてきてステイタスの更新ホームをしていた。

「最近は、流石に成長が止まつてきたな。」

「いや、そう言う事では無いと思うぜ……。」

-----

燕・サカミチ：L.V.  
1

## 【アビリティ】

魔	法	耐久	SSS	S	力
魔	力	器用	S	S	S
：	D	敏捷	S	S	S
：	5	：	9	9	9
2	2	9	6	9	9
6	6	9	5	9	9
					↙
					SSS
					· 1
					8
					6
					3

# 【魔道】

- ・人差し指と中指を一本立て念じる事で使用することができる。  
・発動時、術者を中心に水蒸気爆発が起き、術者の半分の大きさの分身を作る。この分身が動く又は、熱せられることで体積が膨張していき再び分身を中心に水蒸気爆発が起ころる。

# 【スキル】

【大酒呑み】

- ・どんな酒をどれだけ呑んでも、テンションが上がるだけで泥酔することも中毒になる事を無い。
  - ・酒乱になる。
  - ・耐性のんべえがつく。
  - ・体が強くなる。
  - 【星熊童子】  
星熊盃エクセリアで酒を呑むと経験値獲得。
  - ・星熊盃で酒を呑むと経験値獲得。
  - ・酒乱時、獲得経験値上昇。
  - ・酒乱時、身体能力上昇。
  - ・酒が嫌いなるとこのスキルは消滅する。

【星熊童子】

- ・ 星熊盃で酒を呑むと経験値獲得。
  - ・ 酒乱時、獲得経験値上昇。  
エクセリア
  - ・ 酒乱時、身体能力上昇。
  - ・ 酒が嫌いなるとこのスキルは消滅する。

「なあ、お前の『力』のアビリティいつになつたら止まるんだ？」

「わからん。そういや俺の槍に『力』の成長上昇がついているとは、酒の力だけじゃなかつたんだな。」

「ここまで、アビリティが上がつてまだランクアップができないのは、逆に凄いぜ！」

「俺は試練に恵まれないみたいだな。」

俺はステータスを見ながら、今日のノラの話を思い出していた。  
『力』の成長促進かそんな効果があつたとは知らなかつたぜ。  
さて、今は【デメテル・ファミリア】のワインの気分だけど、ワインを星熊盃で呑むのはどうなんだ？

## 06 魔法使つて何が悪い!?.?

ちやおっす!ダンジョンに潜る日々を繰り返し最近11階層にいる俺だ!

俺のステータスは、ほとんど伸び無くなつてきてているのだけど未だに使つてないものがある。

それは、魔法と呼ばれる摩訶不思議スピリチュアルパワーである。俺にも魔法があるにはあるのだが、試す機会がなく今まで放置していた。その理由は、今までのダンジョンの通路が狭かつたから試すことができずにいた。

だがしかし、ここ11回層は霧で周りの確認がしにくい代わりに、広いフロアになつてている。

つまり、俺の蒸氣暴威を使うことが出来る。しかし、あくまで蒸氣暴威は水蒸氣爆発と言えども爆弾だ。

そして、何より問題なのが爆発の威力や大きさがわからない事だ。蒸氣暴威は恩恵を貰つた事により、発現したと思われる。あくまで、神様のくじ引きで貰つた物だから産まれてすぐに持つていた可能性もあるのだが、少なくとも今まで使おうとも思わなかつたし使い方も分からなかつた。

流石に、いつまでも使わずにいるところぞと言う場面での対応に失敗する。

その為に、この11階層で実験することにしたのである。

### 【実験1】

初めに、蒸氣暴威の威力と大きさを知る。その過程で本当に術者自身にはダメージが無いのかを検証をする。(もしアニメ通りの威力ならば封印する。)

### 【実験2】

次に、分身体を作つたらその分身をどう動かすのかを調べ、その際に分身体がどこまで術者から離れられるかを調べる。

手を指2本を立てた状態では無ければならないのか、そしてどこま

で大きくなるのかを知る。

ついでに、アニメみたいに腕から斧見たいのを出せるのか調べる。

### 【実験3】

再び、分身が爆発してから本当に分身に戻るのかを調べる。  
爆発する際、指2本立てて爆発するか否かを検証する。もしくは爆発をせずに分身を消せるのかを調べる。

### 【実験4】

以上、この過程を数度繰り返す。その際前の実験で使った手とは反対の手で実験をする。

### 【注意1】

実験場所はあくまでダンジョンであるため周りに配慮をし、他の冒険者がいた場合はその冒險者がその場を離れるかもしくは自分がその場を離れるまで実験を再開してはならない。

### 【注意2】

ただし、モンスターや冒險者の敵対や襲撃の場合、【注意1】に該当しないものとする。

#### 以上実験概要

—————  
それじや、やつて行きますかね。周りに人影はないから問題はないな。

俺は右手で人差し指と中指を立てて念じた…。しかし何も起こらなかつた…。

ありや、何で出来ないんだ？

俺は手が逆だからできないのかと思い、反対の左手で再度試してみた。しかし何も起こらなかつた…。

そこで俺はとある事に気がついた。

俺の人生今まで何かを念じた事ないや…。

そう、念じるはどうするかが俺にはわからなかつたのである。なんせ魔法なんかない世界で生きていた俺である。

この世界の人人が当たり前にあると信じている魔法は、俺にとつては摩訶不思議スピリチュアルパワーなのである。これは苦労しそう

だ…。

俺はどうにかできないかと思い試行錯誤をした。

この時の俺は凄く油断をしていた。霧で周りが見にくくと言えどもモンスターが集まっているのに気づかないくらい。

俺はどうしたものかと思いふと気付いた、俺はさつき頭の中で「信じる」と考えながら蒸氣暴威<sup>ジョウキボーウイ</sup>を使用した。

そりや、使えないわけだ。いくら念じるからと言つて、蒸氣暴威<sup>ジョウキボーウイ</sup>と考えていなければ使えるわけがない。

周りのモンスターが俺に飛びかかってきた。しかし、油断を仕切つていた俺は気づかない。

なら、頭の中で「蒸氣暴威<sup>ジョウキボーウイ</sup>」と考えて念じた。その瞬間、

「シユウツ、ドオオオン」

俺の、蒸氣暴威<sup>ジョウキボーウイ</sup>が短い爆発音と共に炸裂した。俺に飛びかかってきたモンスターは魔石<sup>マジックストーン</sup>と消し飛んだ。その為、俺は最後までモンスターの存在に気づかなかつた。

半径5M<sup>メートル</sup>ほど消し飛んでいた…。

流石にアニメほどじや無いにしても凄え威力だな。それに本当に俺にダメージが無いが少しだけ爆発の衝撃が来た為一瞬だけ動けなくなるがそのくらいだ。原作の蒸氣暴威<sup>ジョウキボーウイ</sup>の弱点でもある術者の弱体化も神様のいう通り、【大酒呑み】の効果なのか特に怠さとかは無い。

そんな事を思つていると「シユウツー」と音がして俺の半分サイズの分身が出来ていた。どうやら原作の蒸氣暴威<sup>ジョウキボーウイ</sup>と違いあられは降らないらしい。一体どうやつて冷やしているんだ？

特に何も命令をしていないので特に動くことはないが、コイツどう動かすんだ。爆発の衝撃で手の形を崩してしまつたのに分身が出来ているところを見ると、手を崩しても問題は無いらしい。

俺は試しに「歩け」と念じたところ分身は歩き始めた。次に「走れ」と念じたら分身は走つた、どうやら動かすこと事態は念じれば出来るらしい。

俺は適当に走らせていると霧で見えなくなり操作が出来なくなつ

たので、戻つてこさせたのだが3M<sup>メドル</sup>くらい大きくなつていた。

そして、限界が来ていたのだろうまた爆発した。また半径5M<sup>メドル</sup>く

らい消し飛んでのだがやはり俺にはダメージは無かつた。

しかし、今回はまた分身体になる事は無かつた。何でだ？

俺は少し休憩をしてから、反対の手で蒸気暴威を使うとしつかりと爆発は起きた。

やはりダメージは無いが一瞬だけ動けなくなる。そして今回は手を崩さずにいられたので、このままの手で使用する事にする。今回は分身体の腕から斧を出して、モンスターと戦わせてみた。どうやら、インプ位なら一撃で倒せるみたいだ。

そして、爆発の時が来た。さつきは分身体から爆発しても分身体にはならなかつたがこんかいは分身体に戻つた。

俺はその分身体で手を崩してみたがやはり特に消える事は無かつたが爆発してから分身体にはならなかつた。

どうやら蒸気暴威<sup>ジョウキボーアイ</sup>は動かして爆発させる分には手を崩しても問題ないようだが新しい分身体にはならないらしい。

そこから何度か繰り返した結果、膨張途中で爆発させる事はできるが途中で蒸気暴威<sup>ジョウキボーアイ</sup>を解除することが出来ないことがわかつた。

やはりこの魔法は強力ではあるが便利では無い。何より蒸気暴威<sup>ジョウキボーアイ</sup>の爆発でモンスターが魔石<sup>マジックアイテム</sup>ごと消し飛んでしまうのが何より問題である。稼ぎが出ない…。

あれだな、二代目水影鬼灯幻月の術なら【蒸気暴威】より【水鉄砲の術】が欲しかつた…。あれ、超小回り効きそう。

実験を終えて、休憩をしていた俺はふと気がついた。俺の周りに何かが集まっている。

「おい、クソガキ！」

例にも漏れず、ソーマ・ファミリアだつた。

「ザニスの野郎がテメエのクビに賞金をかけやがつた。それにテメエは酒の味をワンランク上げる魔道具<sup>マジックアイテム</sup>を持つていてみてえじやねえか。それをわたしやがれ！」

今の男の言葉に俺は少なからず驚いた。面倒<sup>ゴ</sup>ことはごめんだ、とり

あえずしらを切る事にする。

「魔道具<sup>マジックアイテム</sup>? 何の話だ? 僕は初心者冒険者だぞ。魔道具<sup>マジックアイテム</sup>何て買う金がどこにある。」

そう俺が、魔道具<sup>マジックアイテム</sup>なんか知らんとしらを切ると。

「嘘つくんじやねえ! 調べは付いてんだよ! 確か星熊盃とか言つたな。心底大事にしてるらしいんじやねえか。」

マジかよ、そこまで知つてんのかよ…。一体、何処から情報が漏れた? 星熊盃の事を知つてるのはそんなにいないはずだが? まあ、多分どつかの酒場で呑んでいる時にでも、バレちまつたんかなと思う。

「まあ、どのみちテメエのことはここで潰す! 星熊盃のありかは俺たちの家<sup>ホーム</sup>にテメエをつれていつてゆつくりと聞こうじやねえか。」

相手は目視で10人か、数人控えているとしてどうするかだけど、丁度実験中だしコイツらにも手伝つてもらうか。冒険者にはどの程度効くのかを調べるいい機会だ。

「やつちまえ!」

リーダー格の男の言葉に、俺を取り囲んでいた男たちが一斉に襲いかかってきた。まるで外敵に襲いかかる猿みたいに…。

俺は指を2本立ててあえて声に出して言つた。

「蒸氣暴威<sup>ジョウキボーウイ</sup>!」

その瞬間、俺を取り囲んで襲いかかってきた前衛連中を蹴散らして、限界を迎だ。人によつては在るべきパートが無くなつてゐるが見なかつたことにしよう…。

俺は槍を構えて、蒸氣暴威<sup>ジョウキボーウイ</sup>と共に中衛連中を吹き飛んえた蒸氣暴威<sup>ジョウキボーウイ</sup>を突つ込ませて爆発させた。

前衛連中が耐えられなかつた爆発を後衛連中が耐えられるわけがなく、やはり吹き飛んでいた。一応死者は出たみたいだが、流石にちぎれた奴にはポーションをかけた。(その分の代金は色を付けて払わせた。)

流石に元が根つからの日本人であるため基本殺しあはめんだ。  
伸びてるソーマ・ファミリアの連中を11階層の入り口付近に放置して、俺は今日の実験を終了した。

☆☆☆

ダンジョンでの実験が終わりギルドで今日の魔石を換金した。今日の収入はいつもより少ないのであるが、それでも2万ヴァアリスは稼げたのでよしとしよう。

おばちゃんにパーティを組めだなサポーターを雇えだとかのおこごとを貰いながらおばちゃんと世間話をした。

いやさ、パーティはともかくサポーターは雇いたいんだけど俺がソーマ・ファミリアと揉めてるのが、有名になつてしまつたらしくサポートーが雇えないんだよな。チクセウ

それもこれも、全部ソーマ・ファミリアが悪いいつか必ず何らかの制裁を加える。

ノラだけはたまにパーティを組んでくれるが最近はソロの闘い方が身につき過ぎている気がする。

用は、周りのことや連携の事を考えてないとノラに注意された。おっしゃるとうりです……。

そう思いギルドに出て帰路に着く。

ん？ 襲撃された事をおばちゃんに報告しないのかって？ しても、いいんだけど意味がないんだよね。

いや、俺もさ最初の頃はおばちゃんに報告してたよ「ソーマ・ファミリアに襲撃された。」ってさ、でも2、3回目くらいからかなおばちゃんが「今回の件にギルドは関与しない」って言うだよ。

よくよく聞いたら何があつても関与しないとの事だから、今日みたいに俺がソーマ・ファミリアみたいな大手どうちを比べて完全中立でいるだ。ソーマ・ファミリアみたいな大手どうちを比べて完全中立でいる辺り、やはりあのおばちゃんはやり手だ！

☆☆☆

俺はバイト終わりのトールと家<sup>ホーム</sup>で合流して適当な酒場に入った。

その酒場では今まさに喧嘩の最中なのだが、そんなのお構い無しと俺とトールは酒と飯を注文するために、定員を呼んだのだが酒場の定員は固まつて放心状態になつていた。

理由は、間違いないこの喧嘩だらう男たちが殴りあつていた。 実にしょっぱい喧嘩だ。

俺は一つため息をして席を立ち男達に近づいて行き。

「何がほつたんだか知らないが人様に迷惑かけるのは良くないぜ。」

喧嘩していた男たちを一発ずつ殴り黙らせた。

見事に全員気絶しているので、懐からドロップアイテムだけ頂いて外にほつぽり出そうと引きずつて入り口の方に行こうとすると。

「貴方は、何をしているのですか。」

そこには、おごごとエルフがいた…。

「・・・・・。」

どうしたものか、このエルフは【アストレア・ファミリア】所属のL·v·4エルフ名前は知らん、正義の剣なんかを掲げているから街の治安維持をしている。厨二病で留めて欲しいものだぜ。

「貴方は、何をしているのですか。」

初めて、あつた時同様敵意を向けて来ている。いや待て流石にL

v·4に勝てると思うほど身の程知らずじやない。

「また、エルフ今回の俺は悪くない。まだ呑んですらいないし。」

「どうゆう事ですか？」

「コイツらが、店で喧嘩をしていてなそれだけなら俺もほつといていたのだが、定員が放心状態で注文を受けてくれなくてな、その原因のコイツらを一発ずつ殴つただけだ。あとは店の外に捨てればミッショーンコンプリートだ！」

エルフはため息を一つした。

「それでは、貴方はこのお店の為に拳を振るつたとゆう事ですか？」

「ああ、そうだ…。」

思いつきり、自分の為だが丁度よく誤解したらしいので、そのままにしておく。

この時、周りの客は思った「いや、お前金品奪つてたじやん!!?」

と…。

「わかりました。」

状況説明をしてエルフを納得させてから、男たちを店の外に捨てから自分の席に戻るとあのエルフが座っていた。

「おい、エルフなんでお前がいるの？」

「それは、私が誘つたからだぜ。燕も前言つてただろ「酒場に来たら酒を頼め」つてさ。一人呑みするくらいなら一緒に呑もうぜって。」  
際ですか。それでそのエルフは酒じやなくてジュースを呑んでいるみたいだけど？まあ、呑めない奴に無理やり呑ますのは俺のポリシーに反するからいいんだけど。

「そんで、エルフはその誘いに乗つたと…。」

「ええ、断る理由もなかつたので。」

「俺がいるぞ。エルフお前俺のこと嫌いだろ、今日もいきなり敵意をむけやがつたしよ。」

エルフに皮肉たっぷりに俺は言つた。そう言つてやつた。

「まあ、そうゆうな燕、それはこのエルフちゃんとの初対面が悪かつたからだろう。」

「少なくとも、俺は名前も名乗らないやつを信用しようとは思わないな。」

「そういうえば、私もエルフちゃんの名前を知らないや。あの時は名乗らなかつたもんな。」

その言葉にリューはそういえばと言う顔をした。

「すいません。神トール私としたことが名前も名乗らずに、私は【アストレア・ファミリア】所属の【疾風】リュー・リオンと申します。」  
リューと名乗つたエルフは、トールを向いて自己紹介をした。

その遠回しな俺に言つてないみたいな、行動いらないから知つてるから。そう思い、俺は静かに酒を呑んでいた。

「それじや、リューはさ。やっぱり燕のことが嫌いか？」

「いえ、嫌つてはいないですが好意を抱いてもいません。」

そのあとにトールは俺に同じ質問をした。

「燕はリューの事が嫌いか？」

「そうだな、ソーマ・ファミリアの奴くらいは好きだな。」

俺とリューの答えにトールは一つため息をした。

「どうしたトールお前がため息とは珍しいな。」

「そりやさ、あと時の出会い方は酷かつたけどさ。私としては仲良くして欲しいんだよね。」

「無理だろ／ですね。」

不覚にも、リューと同意見になってしまった。

「そんな、そろつてまで言うことないだろ。結構シヨツクだぜ。」

「俺とコイツじや、どうやつてもソリが合わないんだ。仲悪い同士が仲良くする必要が何処にある俺たちは冒険者だぜ。」

「冒険者なら、もつと周りに配慮したらどうですか？」

「なんだコイツ喧嘩売ってるのか？たまには俺も怒らんだぜ。」

「誇り高いエルフ様は、他の種族を見下すつて聞いたが本当だつたみたいだな。」

俺の言葉に、怒り浸透らしいリューはこっちを睨んでいる。

「なんだよ、図星だつたか？」

「貴方がエルフを語らないでください。貴方は最低なヒューマンだ。」「二人とも、ここまでにしろ。」

少し、殺気がこもつたトールの言葉に俺もリューも黙つた。いくら下界では神の力が使えないからと言えどもトールは軍神だ。そんな奴の殺気に耐えられる奴なんてそうはないだろう。他の席の奴が呑みすぎたか、ゲロつてるな……。

「すいません。神トールお見苦しいところをお見せしました。」

「いや、いいよ。今回は燕がいいすぎたよ、こっちこそごめんな。燕も謝れ今のはお前が悪い。」

そんな、トールは珍しく怒つている風だつた。

「……悪かつた……いいすぎた……。」

「いえ、私こそすいませんでした。」

トールは「まあ、いいか」と言つて酒を呑んだ。  
「だから言つたろソリが合わないってよ。そんな奴が仲良しきよしする意味が何処にある？」

「神トール、私も同意見です。」

俺たちの如何にトールは腕を組んで「ん~」と悩んでいる。急にどうした?

「そもそもいかないんだ。」

「そりや、どういうこつた?」

リューも俺と同意見だつたらしい。

「いやな、先週辺りかなアストレアとアリーゼが私のバイト先のパン屋に来てな。そこでリューと仲良くしてやつて欲しいと言われてな。私としても特に問題ないから二つ返事で了承したんだ。しかし、ここまで二人が仲が悪いとは思わなかつたがな。」

トールの言葉にリューは驚いていた。

「でもよ、それつてトールお前個人に言つたことで俺は関係無いんじゃねえの。」

「いや、アストレアが「リューも喧嘩出るだけの人ができたのね。」と素つ頓狂な喜び方してたからさ、多分燕のことだと思うぜ。」

おい、まじかよ。てゆうかアストレア様そんな頭の中お花畠なのかよ。

「そうですか、アストレア様が…。」

なんだ、そんなに今の話衝撃だつたか?

「神トール、今日はここで失礼します。これはお勘定です、今日は受け取つて貰えますね。」

「ああ、今回はしつかり呑み食いしたからな勿論だぜ。」

リューは金を払つて店を出て行つた。急にどうした。

「さて燕、私たちも帰ろうぜ。」

「ああ、そうだな」

今日の俺たちは珍しく余り酒に酔わずに店を後にした。

帰り道、俺もトールも特に話もせずに家に帰つた。

## 07 喧嘩買って何が悪い!?

おはようござまーす最近、挨拶のレパートリーがもう無いなと思ってる思つてる俺だ!

今日も今日とて、ダンジョンに向けて歩いているのだが初心者冒険者の朝は早い。どのくらい早いかと言うとまだ7時である。

まだおねむの時間です。すごく眠い。

俺の感覚的には冒険者って言うのは、初心者、中級者、上級者でダンジョンに潜る時間が違う。

俺みたいな、初心者は時間をかける=稼ぎが出るので割と朝早くからダンジョンに潜る。

中級者は、パーティで潜るので俺たちより少し時間が遅い。と言っても中級者もやはり時間をかける=稼ぎが出るので、俺たちとそう違いはしない。

上級者は時間なんて気にしない。大規模遠征でも無い限り時間とかを気にせずに好き勝手に潜っている。用は気が向いたらダンジョンに潜り飽きたら出てくる。それでも、俺たちとは比較にならないくらい稼ぐので流石は上級者と言つた感じだ。

俺が何を言いたいかと言うと、初心者か中級者の違いつてパーティを組んでいるか否かだと思うわけだよ。

そこで俺はどうかと言うとたまにノラとパーティを組んでいるが基本ソロである…。

つまり、俺がソロでダンジョンに潜り続ける限りどんなにレベルが上がろうとも俺は初心者のままなのでは無いだろうか?  
「その辺ノラはどう思う?」

待ち合わせ場所にいたノラに俺は聞いてみた。ノラは「は?」つて顔をしていた。

「おはようございます、燕さん。いきなりなんですか?」

「おはようさん、ノラ。いやな、何処からが初心者で何処からが中級者なのかつて話だよ。」

俺の疑問に、ノラは「なるほど」と考えながら言った。

「基本的には、L v. 1が初心者冒険者でL v. 2からが中級者冒険者と言うのが一般的ですね。」

「ああ、そうなの？」

この街というか、この世界の傾向として基本的には強いか弱いかはレベルで決める。確かに、レベル1つ違えば文字通り格が違う。

だからと言つてもレベルが高い方が正しいと考えるのは、この世界の悪癖だと思う。

「でもよ、ほとんどの冒険者はL v. 1でその冒険を終えるよな、それは半人前でくたばつたてことにならないか？」

「流石に、そんなに極端ではないと思いますが実際L v. 2になるのは一握りですが、1年半から三年の間でL v. 2になるようすで期間的にもそのくらいだと思います。」

「そういうええ、ノラは冒険者なつて1年半か時期的にはL v. 2になつてもおかしく無いのか？」

「はい、アビリティにD以上のものがいくつかあるのであとは試練があればランクアップします。」

試練か、そういうええ俺も初日のダンジョン探索の時ミノタウロスと戦つたけど、俺はあれだけじゃ試練にはならなかつた。そう考えると俺がランクアップする為にはいつたいどんなバケモンと戦う必要があるんだか…。

「それでは、ダンジョンに行きましようか。」

「あいよ、10階層でいいのか？」

「はい、すいません。私に合わせて貰つて。」

「いや、構わねえよ。どの道ソロよりはパーティの方が稼ぎが出るしな。」

「それでも、毎回3・4万ヴァリスの稼ぎが出るのはおかしいと思います。」

俺たちは10階層でトロールやインプなんかと戦つていた。

ノラは前衛、俺は中衛でサポートとサポートをしてる。正直、俺が突つ込めばすぐに終わるのだが、これはあくまでノラのランクアップの為のダンジョン探索である故に前衛を譲つている。ついでに俺

はパーティ戦闘と言うものを勉強している。

ノラはSAOのユウキみたいな上から下まで真っ黒な直剣を使って前衛でスピードで相手を翻弄しながら戦っている必殺技はマザー・ズロザリオかな？。それにしても、小人族には珍しく前衛である。確かに後衛をやるよりは経験値が入りやすいが、それでも俺が思うに種族的に珍しい。とゆうか小人族が冒険者つて言うのが珍しい、基本的ににはサポートをやつているイメージだ。

いや、サポートが冒険者では無いと言う差別発言じゃなくてね。客観的なイメージ。そう思いながらサポートの仕事である魔石拾いと解体をしている訳だけ……。

「ああ、サポートが欲しい。」

俺はそうぼそつと言つた。

「サポートですが。」

どうやら、ノラに聞こえてしまつたみたいだ。

「いやさ、サポート雇いたいんだけどよ。ご存知の通り、ソーマ・ファミリアのゴタゴタのせいで基本的にサポートどころかパーティすらごめんつて事になつていてるみたいなんだ。それどころか团长ザニスつて奴が俺に賞金をかけやがつたから、この前全然知らんファミリアに襲われた。」

「なんとゆうか、踏んだり蹴つたりですね。」

ノラは同情するみたいな目で俺を見てくる。やめろ同情するならサポートを紹介てくれ……。

「流石に、最近はうるさくて仕方ないんだけど二つ大きな問題があつて、手を出しあぐねてるんだよな。」

ノラは「二つ？」と疑問形で聞いてきた。いや、聞いてきたのかな反応しただけかも。

「二つ目は、ソーマ・ファミリアの規模のデカさだ。正直、レベル3とか出てきたら、どうしたらいいか分からん。」

「なるほど、そういう事ですか。なら、二つ目はギルドのペナルティですか？」

え、ギルドのペナルティ？ そんなあるのそういうえば新しいファミ

リア説明の時にファミリアの抗争がどうのつておばちゃんが言つてたな忘れてた。

「まあ、え、あ、そうだな、それが二つ目の問題だ。うん！ギルドは敵にまわしたく無いからな。」

俺は珍しくきよどつてしまつた。我ながらキモいな。ノラは少しぐト目のままだ。おい無表情お前のジト目は普通に怖いぞ。

「ソーマ・ファミリアのお酒ですか？」

ちつ！ばれたか、勘のいい子娘は嫌いだよ！

「ああ、そうだよ。あそこの酒は美味しいからな。正直潰したく無いんだよ。」

「まるで、潰すことくらいはできるみたいな言い方ですね。」

「相手は大手だからな正攻法では流石に無理だろだから、もし潰すならなりふり構わずって感じになるな。」

ノラが「なりふり構わずですか。」と聞きかいしてきた。俺は話すかどうか考えて少し躊躇してから話した。

「まず、ルール無用の戦争なら俺は奇襲や襲撃や罠を使つて一人ずつ確実に相手の人数と戦意をへし折つていくな。」

「なんとも、冒険者らしからぬ戦い方ですね。」

「わかってるさ、だから使いたく無いんだ。」

ノラは「なるほど」と言つて少し考えてから次の質問をした。

「なら、ルールがあつた総力戦ならどうですか？」

「そんなもんが、あるかは分からないがその場合は俺の手札全部とリミッターを外すだけだな。」

ノラは「リミッター？」と聞いてきたが用はただ酒を飲んで酒乱状態で暴れるだけである。もはや狂戦士バーサーカーである。

そんな事を話していると、またモンスターが周りに湧いてきたみたいだつた。

「ノラ、また集まつてきたみたいだぜ。」

「はい、サポートお願いします。」

俺とノラはそのままモンスターを倒して、俺はサポーターらしく魔石を集めた。ああ、サポーターやといてえ。

☆☆☆

今日の稼ぎをノラと分配してから、トールと合流して酒場で酒と飯を頼んで今日も今日とて酒を呑んで酔いが回り始めていた。

「そういうえば、トール今更だけどよ。」

「なんだよ、改まつて？」

「いやな、俺がトール・ファミリアに入つてから、二ヶ月くらい経つけど新入団員は見つからないのか？」

俺の言葉にトールは持つていたフォークを机に落として目をウルウルさせて突つ伏した。

「うわーん！ 私だつて頑張つてるんだ！ だけど全然新入団員が見つからないんだ。この見た目のせいか？ 口キみみたいに絶壁だけじやなくて身長もないこの見た目なせいか！」

うわつめんどうくさ！ 今日のトールは泣き上戸かよ！ こうゆうときは無視無視、俺も自分の酒を呑んでほつと。

「まあ、落ち着いてくださいトール様。こっちのお肉も美味しいですよ。」

酒じやなくてジュースを飲んでいたノラがトールを慰めていた。ほつとけば、いいのに。

「うん……。美味い……。ありがとう、ノラ。ぐすん」

「いえいえ、トール・ファミリアはまだ始まつて二ヶ月なんです。これからですよ。」

他派閥の眷属の子に慰められる神つてどうなんだ。ぱつと見あれだな口リママに慰められてる口リだな。実にゆりゆりしい。

「だけど、新入団員の件にしてもソーマ・ファミリアのいざこざを終わらせてからじや無いと結局意味ないよな。」

「確かに、その辺どうなんだよ。私はいまいち状況を知らないからな。」

「どうもこうもねえな、ノラに話した通りたまにダンジョンで襲撃を受けて襲撃してきた奴を全員蹴散らして終わりだな。団長のザニ

スつて奴が俺に賞金をかけやがったせいで全く知らないファミリアに襲撃された事もあるけどな、どの道蹴散らして終わりだ。」

「ん？ ちょっと待て！ お前、賞金がかけられてたのか！ そんな大事な事、私初めて聞いたぞ！」

そういうえば話していなかつたな、ギルドには話したから話した気になつていた。

「燕さん、こんな大事な事を主神に話していなかつたなんて、流石にどうかと思いますよ…。」

「はい、すいません。これに関しては俺が悪いです。いやさ、俺のソーマ・ファミリアとのいざこざは有名だつたからてつきり知つていいものかと、ホウレンソウが出来ないとは俺としたことが。

「まあ、そうゆう訳だ。ソーマ・ファミリアをいい加減どうにかしないとトール・ファミリアのお先が真っ暗だ。」

「真っ暗だつて、はあ…。確かにそうだけど、まさか燕がそこまでになつてているとは思わなかつたぜ。酔いがぶつ飛んだぜ。」

トールは頭を抱えてどうしたものかと悩んでいるが、俺は特に何も考えてない。

「そういうえば、星熊盃についても知つてるみたいだつたぜ。」

ノラは初めて出てきた単語に小首を傾げていた。

「星熊盃とは、何ですか？」

「ありや、ノラは知らなかつたのか。星熊盃は燕が持つている魔道具<sup>マジックアイテム</sup>だぜ。」

「魔道具<sup>マジックアイテム</sup>ですか！ 燕さんはそんなものを持つていたのですか？ 戰闘で使つてることは見たことがないんですけど。」

「星熊盃は戦闘用の魔道具<sup>マジックアイテム</sup>じや無いからな。」

俺は懐にしまつてあつた星熊盃を机に出してノラに見せる。

「これが、星熊盃ですか？ これは、いつも燕さんが使つている盃ですよね。」

そのノラの質問にトールが答えた。

「この星熊盃は酒をワンランクアップさせると言うもので、用はただの酒が美味しい酒になるつて言う盃だ。これでソーマの酒を呑むと本

当に美味いんだぜ。」

そう言いながら、トールは星熊盃に酒を注いで呑んでいた。いや、だから、それ俺のだから。

そんな話をしていたら、酒場に冒険者がぞろぞろと入ってきた。エンブレムは三日月に聖杯のようなもの、「ソーマ・ファミリア」だ。

そして俺の周りに集まつた。

「やあ、久しぶりだな。私の顔覚えているな。」

そう言う、男の顔を見たがこれが全然覚えていないのである。

「えっと、どちら様で？」

「貴様あ！私の事を忘れただと！あの時、私にした屈辱的な行為を忘れたと。」

え、マジ、全然覚えてないわこの眼鏡。

「おい、燕コイツあれだ、アリーゼとリューに初めて会つた時に酒場で絡んできた奴の一人だぜ。」

「え、そうだっけ？えーと？あ！あれか俺に股間を蹴られた奴だ！」

目の前の眼鏡は、顔を真っ赤にしながらもすぐに落ち着きを取り戻し言つた。

「私は【ソーマ・ファミリア】團長のザニス・ルストラと言う。我がファミリアの団員は燕・サカミチ貴様にダンジョン内で酷い怪我を合わせられた。その慰謝料5000万ヴァリスと魔道具<sup>マジックアイテム</sup>星熊盃を要求する。」

確かに、俺を襲撃した連中はもれなく蹴散らしたが、それはそつちから喧嘩をふつかけてきたからだ。

それにこの件にギルドは関与しないと公言している。一体誰に責任追求をさせるのだか…。

「だが、今回の一件ギルドは一切の関与をしないと公言しているため、貴様の非道な行いは世に出ない。」

まあ、そうだな。それでコイツらはどうするのかね。

「そこで、我がソーマ・ファミリアは貴様らトール・ファミリアに戦争遊戯を申し込む。」

「戦争遊戯ってなんだ？」

「随分と勝手を言つてくれるじゃ無いかソーマの子供たち、それはソーマの奴も了承しているのか？」

トールはそう言つて、自分の酒をテーブルに置いた。

「もちろんです。神トールこれは我が主神ソーマ様の意志にござります。」

いや、話を勝手に進めるなよ。戦争遊戯が何か説明してくれよ。

「わかつたぜ、戦争遊戯の挑戦を受けよう。」

なんかノラがあわあわしてるな。俺は状況についていけない。

「流石は軍神というわけですね戦争には自信ありと言う事ですか。」

「別に、そう言うわけでは無いさ。だがこれ以上、燕の周りをうろちよろされるとうざつたるいからな、ここで潰しちまおうと思つただけだ

ぜ。」

「わかりました。それではギルドへの申請はこちらでやつて起きます。こちらの要求は慰謝料5000万ヴァリスと魔道具星熊盃の二つです。そちらの要求を聞いてもよろしいですか？」

「なにぶん、急な申し出だつたからな。ぱつとは思いつかないから次回の話し合いでこちらの要求は保留してくれ。」

「わかりました。それでは後日。」

そう言うと眼鏡もといザニスは酒場を出て行つた。そこでやつとノラが口を開いた。

「よろしいのですか。トール様戦争遊戯なんて…。」

「まあ、遅かれ早かれだな。それにこつちも了承しちまつた以上後には引けないさ。さて、今日はこの辺でお開きにしようぜ。」

「そうですね。戦争遊戯のことへファイストス様に報告しておきます。」

トールはノラに「よろしく」と言つて酒場を出て今日は解散をした。

☆☆☆

家に帰つてきてから、戦争遊戯についてトールに聞いた。

あんな酒場でそんなとんでも無い事を決めていたなんて、俺はびつ

くりしたよ。

そして、なんと戦争遊戯で戦うのは俺のようだ。

え、俺一人対ソーマ・ファミリア総戦力なんて俺には流石に荷が重いじゃないか？ いくらなんでも無理ゲーじゃね。そう思い俺が放心状態でいると。

「まあ、なんだ。ウォーゲーム戦争遊戯になつちまつたものは仕方がない。燕が勝てば全てが万々歳で負けると借金生活だな。死ぬ気で頑張れ!!？」  
「いや、無理だろ。流石に勝負の内容次第じや勝つだの負けるだなじや無くなるぞ。」

「その辺は、任せろなんとかする。まあ、総力戦の対決の可能性も考慮してもらつた方がいいかも知れないけどな。」

「結局、話し合つてみないとわからないというわけか。」

俺はでかいため息を一つ吐いてこれからどうなるんだと、今後の事を考えた。マジで、どうしよ…。

そこからは俺も珍しくやけ酒だつた。こうゆう時こそ泥酔がしたい。しかし、俺は泥酔ができない何というジレンマ。

# 08 ルール決めて何が悪い!??

神会名前は何とも世界の一大事を決めそうな感じだが、実際は最近のあつた事の報告会とか、ラキア王国の対応とか、二つ名をつけたりとか、そんな事を決める場所という様なイメージがある。

基本的にこの神会は三ヶ月に一回行うらしい。前やつた時は燕がこのオラリオに来る一週間くらい前だったので、今回の開催は時期的にズレている。

それもそうだろう。今回はイレギュラーな神会なのだから、普段の神会なら好き勝手に自分の言いたい事を話している神たちも今日は割と静かにしている。

それもこれから始まる面白い事に興味が尽きないからである。

「俺がガネーシャだ!!?」

もちろん、例外はある。

「まさか、燕の二つ名を決めるより前に、まさか神会に参加する事になるとは思っていなかつたぜ。」

神会の中心の席に今回の対戦相手に向かい合つて座る。

向かいに座る「ソーマ・ファミリア」の主神ソーマ、神たちの暗黙の了解としてソーマは酒作りしか興味がなく、少なくとも戦争遊戯なんかやる神では無い。

そんな神が今回戦争遊戯をするという。そんなビックイベント娛樂に飢えた神が見逃すはずが無い。

「・・・・・」

しかし、ソーマは特に話すことが無く、黙つて座っている。

「それじゃ、通算何回目になるんかわからんけど神会を開催するで、今回の議題は【ソーマ・ファミリア】と【トール・ファミリア】の戦争遊戯や。」

「シャアー!!?」

「イエーイ!」

「俺がガネーシャだ!!?」

「いや聞いてねえよ!!?」

戦争遊戯<sup>ウォーゲーム</sup>と聞いてあーだこーだ好き勝手に、神が騒いでいる。

「ほんで？ソーマにトール今回の試合形式は決まつとるんか？」

その言葉に、トールは待つたをかけた。

「その前に、今回の戦争遊戯の勝者の要求を確認しようぜ。前回はそつちの要求は聞いたが、まだ私の要求は言つてないぜ。」

「まあ、そうやな。そんでソーマは勝つたら何が欲しいん？」

司会のロキの言葉にソーマは口を開いた。

「俺たちが勝つたら、慰謝料5000万ヴァリスと魔道具<sup>マジックアイテム</sup>星熊盃<sup>マジックアイテム</sup>を要求する。」

ロキは「魔道具<sup>マジックアイテム</sup>？」と聞き返していた。

「何や星熊盃<sup>マジックアイテム</sup>って、今回の要求にもなつとるからトール説明してもらうで。」

ロキに説明を要求され、少し躊躇したがトールは話した。

「ただの盃<sup>マジックアイテム</sup>だぜ。」

「盃<sup>マジックアイテム</sup>? どうゆうことや。」

「そうただの盃、戦闘力を上げたりたりとか傷を癒すとかの効果は一切無い。」

「？」

神会<sup>デナトウス</sup>に来ている神が全員そう思つた。そんな特に何の変哲の無い盃をなぜソーマ・ファミリアが欲しがるのか？しかし、その理由はすぐ分かつた。

「ただ、星熊盃に注いだ酒のランクが一段階上がるだけのただの盃だぜ。」

その言葉にその場にいる神は一様に驚いている。確かに、戦闘面には一切の意味をなさない。

しかし、それは戦闘面だけである。普段使いや接待なんかに優れているし、何しろそんな魔道具<sup>マジックアイテム</sup>があるなら美術品としての価値は計り知れない。

「なんだ、その魔道具<sup>マジックアイテム</sup>！俺にくれよ、トール！」

「いや、私にこそ相応しい！」

「俺がガネーシヤだああ！」

「だから聞いてねえよ、ガネーシャ!!?」

また、騒ぎ出した神をトールはひと睨みして黙らした。

「トールあんたの殺氣は洒落にならんから程々にしどき。それにしてもソーマの子供たちが星熊盃を欲しがる理由がわかつたところで、トールは勝つたら何を要求するんや。」

「私たちが勝つたら、まず燕にかかるてる賞金を取り消して今後のソーマ・ファミリアのトール・ファミリアへの敵対行動を禁止する。」

「まあ、妥当やな、賞金の話はウチも聞いとるわ。」

「そして、毎月ソーマの酒を完成品と失敗作共に一定量トール・ファミリアに無償で納品すること。」

「！失敗作はともかく完成品つてトールそれ子供に呑ませるとか言わんやろうな。」

「私が呑ませるというより燕が呑みたいって言うんだ。」

「子供の方がかいな。」

「それで、ソーマ私の要求は問題無いな。」

トールの言葉にソーマは首を縦に振った。

「それじや、改めて対戦方法決めようか。下手なのになると盛り上がりで！」

そこで、ソーマは口を開いた。

「俺はファミリアどうしの総力戦を希望する。」

その言葉に、他の神は「それはつまらないだろう」と口々に言つた。てゆうか、実際そうである。ただ一人を除いて、全員の神がそう思う。

「いいぜ。」

「つ！正氣かいな、トールあんた十中八九負けるで！」

この場の神が全員同じ考えだ。トールの眷属は二ヶ月ちょっと前に冒険者になつたばかりのLV.1が一人だけ、いくらなんでも無謀である。それ以上に自惚れすぎているソーマ・ファミリアにはLV.2が少なくない数所属しているのだから。

「ただし、条件が二つある。」

「なんだ。」

ソーマは短くそう言つた。

「一つ目はルールは私が決める。何、LV. 2以上を出すなつて事じゃないぜ。」

「聞こう。」

「対戦形式はフラッグ戦でいこうぜ。アイテム、武器、防具は自由それと原則殺しは無しだ。」

「フラッグ戦? どう言うことや?」

そうロキはトールに聞いた。

「何、難しい事じや無いぜ。用は欲しい物は冒険者らしく自分で手に入れろつて事だ。詳しいルールはこうだ。場所はコロシアムで行う最初に星熊盃を燕に持たせる。その後、3時間経過後に星熊盃を持つていた方の勝ちの冒険者ウォーゲームらしい簡単なゲームだぜ。」

トールの考えた戦争遊戯のルールは、それでもやつぱり神たちはトールの勝ち筋がわからないので反応はそれであつた。

つまりないゲームになると思う者、面白いゲームになるだろうと思う者、そもそもどうでもいいと思う者三者三様である。

ただひとつだけ分かることが神たちにはある。それはトールが本気で勝ちに行つていることである。トールは仮にも軍神、ゲームと言えども戦争で手を抜くことはない。

「ルールの方は俺も問題ない。」

ソーマが了承した事により、ルールは決まった。

「そんで、トール二つ目の条件つて何や?」

ロキの質問に神たちの視線はトールに集まつた。

トールは一拍あけてから言つた。

「ソーマ神酒の完成品をかめ一つ分くれ。」

ロキも含めてこの場にいた神たちは思つた。

「「酒かよ!!?」」

そんな、周りの神たちの事はお構い無しという様に、ソーマはその条件を了承した。

ロキは氣を取り戻し進行を続けた。

「そんで、会場がコロシアムだと一週間くらい、戦争遊戯ウォーゲームできへんな。」

だから、開催は一週間後でトールもソーマもええか。」「私は問題無いぜ。」

「俺もそれでいい。」

「よし、それじゃ詳しい事が決まったところで、まとめようか。」

## 《戦争遊戯》 [ウオーゲーム]

### 《ルール》

- ・参加人数は、互いのファミリアの総力戦で行う。
- ・対戦形式は、フラツグ戦とし初めに【トール・ファミリア】団員【燕・サカミチ】の持つ魔道具星熊盃を戦争遊戯開始3時間後に保有している陣営の勝利とする。
- ・アイテム、武器、防具は自由である。
- ・原則として相手を死に至らしめる事を禁止とする。
- ・戦争遊戸の開催日は神会デナトウスを行った、一週間後とする。

### 《開催場所》

### コロシアム

### 《追記》

- ・【ソーマ、ファミリア】は戦争遊戯開催日の三日前までに神酒の完成品をかめ一つ分トール・ファミリアに引き渡す。
- ・コロシアムの使用料は負けたファミリアの負担とする。

### 《勝者の要求》

### 【ソーマ・ファミリア】

- ・慰謝料5000万ヴァリス
- ・魔道具星熊盃を引き渡す。

### 【トール・ファミリア】

- ・【燕・サカミチ】にかけている賞金を取り消して、今後一切の【ソーマ・ファミリア】が【トール・ファミリア】に敵対する事を禁止する。
- ・【ソーマ・ファミリア】は毎月一定量の神酒の完成品と失敗作を無償で納品する。

「トールもソーマもこんな感じでええか?」

口キの言葉にソーマとトールは首を縦に振り、神会は終わった。  
神会<sup>デナトウス</sup>が終わり、トールが帰ろうとしたら口キが話しかけてきた。

「トール、本当にあのルールで良かつたんか。」

「良かつたとは何のことだ。」

「茶化すなや。今回の戦争遊戯勝ち目なんてありやしないで。」

その言葉に、トールは少し笑つて答えた。

「口キ、二ヶ月前に入団試験をやって、入団希望者全員落としたみたいだな。」

「それが、何や？まさか、燕つて子がうちの試験を落ちた子だつて言うんか？」

「いや、燕は入団試験を受けて無いぜ。」

「？どうゆう事や？」

「私はあの日、口キ・ファミリアの入団試験を受けに行こうとしていた燕と『豊穣の女主人』てたまたまあつた。そこで私の眷属にならなかと言つたら、まあ、色々言われたが、私の眷属になつてくれた。」「それがどうしたんや。そりやうちに受かる気がしなくて逃「いや、違う。」！何やと。」

トールが「燕は怖くて逃げた」と口キが言う前に口を挟んだ。

「燕は口キ・ファミリアの入団試験を受けていれば、間違いなく受かっていたぜ。そんな奴が眷属ゼロの零細ファミリア以下のファミリアに入るつて言つたんだ。その時なんて言つたか分かるか？」

「なんて、いつたんや。」

「ただ一言「面白そうだな」つて言つたんだぜ。神の私がコイツは一体何を言つているのかがわからないつて思つちまつたんだぜ。」

「なんや、変な奴なんやな。」

「そう、変な奴だ。変人でイカれていて頭が悪い。それが私の眷属<sup>子供</sup>」

【燕・サカミチ】だ。」

口キが「そうかい」と一樣は納得した。

「それに口キ。」

「なんや。」

「自分の眷属<sup>子供</sup>を信じない神<sup>親</sup>がどこにいるんだ？」

「そうやな。」

そう言つて、ロキとトールは別れた。

☆☆☆

トールが家ホームに帰つてきて、俺はトールから神会デナトウスの顛末を聞いて想像外の方向のルールに驚いた。

そして、落ち着いた俺はトールの頬を引っ張つていた。

「おい、トール何をどうやつたら総力戦なんて無謀極まりない対戦形式になるだよ。」

そうゆう俺はぐいーっとトールの頬を引っ張りながら聞いた。

「いひやい！ いひやい！ ありやまるから、ゆるひいて。」

俺はトールの頬から手を離して、これからどうするか話し合つてみると「コンコン」と家の扉から音がした。

なんだ、こんな時に客か？ ソーマ・ファミリアの襲撃とかじや無いだろうな。ルールの規定によれば、戦争遊戯ウォーゲーム前に襲撃してはならないとかつて制約は無かつたよな。

そう思いながら、扉を開けると。

「ノラにヘファイストス様じゃ無いですか、こんな時にどうしたんですか。まあ、とりあえず中へどうぞ。」

「はい、お邪魔します。」

「ええ、失礼するわ。」

ノラとヘファイストス様を部屋の中に招き入れ、ソファに座つてもらつた。

「へえ、なんだかんだで来るのは初めてだつたけど、こんな感じになつているのね。」

ヘファイストスは酒場を見回しながらそう呟く、そこにトールが言つた。

「なんだ、ヘファイストスにノラじゃないか、今日はどうしたんだ？ こつちは戦争遊戯ウォーゲームの準備でいろいろ忙しくなりそうだぜ。」「今日は、その戦争遊戯ウォーゲームのこと話があるのよ。」

「どうゆう事だ？」

そこで、ヘファイストスはノラを見たので俺たちもノラを見た。  
「トール様それに燕さん私をトール・ファミリアに改宗させて下さい。」

その言葉に俺とトールは顔を見合させて「?」となつた。

「なんでだ?」

そう俺はノラに聞いてみた。

「なんでつて、今の状況的に戦力は一人でもいた方がいいと思いま  
す。」

「言つてる意味は分かるだからつて、そんな理由で入団されても……。  
「私は燕さんの専属鍛治師です。こんなところで潰れて貰つては困ります。だから……。」

「ありがとうございます、その言葉は普通に嬉しい。だけど、ファミリアの団長として今のノラを入団させる訳にはいかない。まあ、団長つて言つても、そもそも団員が俺しかいないから暫定団長なんだけどな。」

俺の言葉に、ヘファイストス様もノラも驚き理由を聞いた。

「俺は、ノラに俺たちが他派閥に潰されそうだからというつまらない理由でうちに入つて欲しくない。」

「いや、つまらないつて、結構な理由だと思うけど。」

俺の言葉にヘファイストス様がツツコミを入れる。ヘファイストス様つてツツコミするんだ。

「俺が戦争遊戯<sup>ウォーゲーム</sup>で勝つた時、まだうちに入りたい思つてくれていたらその時に言つてくれ、トール共々歓迎するぜ。トールもそれでいいだろ。」

「おう、もちろんだぜ。そうゆう事だ、ノラお前はせつかく面白い奴なんだつまんない事するんじやねいぜ。」

俺とトールにそう言われて、下を向いたらと思つたらパツとこつちを向いて。

「さつきから、聞いていれば人のことをつまんないつまんないつて言い過ぎですよ！はあ、わかりました。ですが、ここまで言つたんです負けるなんて許しませんよ燕さん。」

「おう、任せとけ！」

任せろと言つたはいいがほんの数分前まで、どうすればいいかわからんと右往左往していた奴の言葉とは思えないほど、自信満々にそれでいて割とやけくそ気味に返事をした。

そこで、トールがヘファイストス様とノラに話しかけた。  
「そうだ、ヘファイストスとノラ一つ仕事を頼みたいんだけどいいか？」

「ええ、構わないけど武器？ 防具？」

しかし、トールは首を横に振つて続けた。

武器でも防具でも無いのにノラとヘファイストス様に頼む仕事つてなんだ？ 僕としてはこれといって思い付かねえや。

「いや、違うぜ。正直、戦いには実際あんまり関係ないし鍛治師に頼む仕事でも無いぜ。だけど、何より大事な物を信頼ができる2人に頼みたいんだ。」

そう言つて、トールはそれが書いてある紙を2人に見せた。

「はい、私の出来るだけの事をさせて貰います。」

「なるほど、わかつたわ。ノラもやる気みたいだしね。」

「それとは別に燕さんの槍の整備をしておきましょ。」

「ああ、よろしく頼む。」

そう言つて、ヘファイストス様はトールから紙を受け取り、俺はノラに槍を渡したら仕事をするとそのまま2人は帰つていった。

そして、また扉がノックされた。忘れ物でもしたのかな？ 僕は扉に近づき扉を開けた。

「誰だ？」

全然普通に知らない奴がそこにいた。この男は一言で言つて、胡散臭いそんな感じの金髪の羽付き帽子を被つた男が青髪メガネの少女？ を連れていた。

「俺はソーマ・ファミリアから酒を届けにきただけの仲介人さ。」

「お前、ヘルメスか久しぶりだな。」

「やあ、トール。神酒の完成品を届けに来たから受け取つてくれ。」

「ああ、確かに受け取つたぜ。ヘルメスこれから先もお前たちが仲介

役になるのか?」

「ああ、そのつもりだ。しかし、そんな物どうするつもりなんだい?」

「そりや、酒なんだから呑むんだぜ。」

「そりやそうか。それじや、トール達も忙しいだろうし俺はこの辺で失礼するよ。」

「そうか、それじやありがとう。ヘルメス。」

そう言つて、ヘルメス様は青髪メガネの少女?を連れて帰つて行つた。とゆうか、あの青髪メガネの少女?は一言も話さなかつたな。

☆☆☆

あれから数日たち、明日は戦争遊戯ウォーゲーム当日俺はトールと神酒ソーマの失敗作を呑んでいた。

「それで、明日には全部決まる。そんな当事者である燕はどんな気持ちなんだよ。」

トールは俺の持つ星熊盃に酒を注ぎながら聞いてきた。

「当事者はお前もだろうが。こうゆう時に恥ずかしくもかつこいい英雄みたいなことが言えればいいんだけど、残念ながら俺は英雄に興味ねえからな。ここまで来たら騒いだつて仕方ねえし、まあ、せつかくのゲームだ精々楽しむとするさ。」

俺は明日の事を考えながら酒を呑む。やつぱうま~